

---

門

らくようつらな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
門

【Nコード】  
N0931C

【作者名】  
らくようつらな

【あらすじ】  
『あんたは、魔法ってどういうもんだと思う？』 ニット帽の願いごと代行人より。常識に魔法が使われている世界の主人公が現実世界に飛ばされ、魔法が使えなくなった。非日常中心の日常生活。

## 閉幕（前書き）

マイペースに書いていきますね。

金髪ニット帽にはお気をつけください

。

## 開幕

「お似合いの衣装だねえ その白を緋色に染めるのが楽しみだ」  
そんな台詞と共に何か近づいてきて、刃物が迫る  
来るな 来るな 来るな !

意識が切り替わり、ぼんやりとした視界から一気に覚醒する。

「・・・目覚めの悪い夢だったな」

何のかわりもない、いたって普通のいつものおれの部屋だ。

「そりゃあお疲れさん。」

・・・ただひとつの違和感を除いて

「・・・！」

部屋のすみにいたのは夢に出て来た

「何か」。もちろん鍵は閉めてある。誰なんだこいつはと思わず後  
ずさるおれ。当然だ、誰とも知らない他人が自分の部屋に進入して  
いるのだから。

「あらあらあ、折角迎えに来たつてのにそりやないでしょ」

こいつが指を鳴らすと、何もなかった場所に『門』が現れた。

<http://gyuunyudoumei.web.fc2.com/eb/nit01/banner.jpg>

魔法と言えばあんた等は何を浮かべる？

未知の力、不思議な能力、ありえやしないもの・・・人それぞれだろ  
う。

今回俺が接触したこいつ・・・もとこいついみかす本内文一の世界ではそれが当たり前  
に存在しているんだ。

おっと、ファンタジーってわけじゃない。あんた等の世界にそのま

ま魔法がプラスされた感じかな？

門・それは世界と世界を繋ぐ扉。高等魔法と伝えられ、現代の人間に扱えるものではなく、まったくのお伽話にしか存在しないものだ。と思っていた。

「『門』ってのはな、発生させた世界と似た世界に作るのが一番簡単なんだぜ。」

ああ、オレが誰かって？

『ニット帽の願いごと代行人』とでも名乗っておきますか。。

視界がフラッシュしただけにしか感じられない。それにここはあきらかに何一つ変わらない自分の部屋だ。

ただひとつの違いは魔力を感じないこと。

「嘘だろ・・・」

試しに色々魔法を使おうとしてもまったく発動しない。本当に魔力がないみたいだ。

彼ならいつもの日常と違うギャップに戸惑いながらもなんとか過ごしていくだろう。

本文文一には、『素質』があるんだからな。

お喋りが過ぎたかな？それじゃあ、また会おう

DAY 1 (前書き)

ぐだぐだ書いてます。

## DAY 1

飛ばされた先が自分の部屋でよかったのやら。辺りを探るのも元の世界と違う点を調べるのも数分で終わった。

正直魔法関連のものがすべてべつの物に変わっていることを除いて、何も変わってない。外を覗いてみると家の前でいつも見るおばさんが談笑している・・・どうやらここは本当に唯魔法がないだけの世界らしい。

部屋の本や新聞等を見ると細かな色々意味合いも違っているようだな・・・たとえば「マジックショー」。

今まで日常的に見て来た瞬間移動や空を飛ぶだけの事が見世物になっているらしい。実につまらなそうだ。

この非常事態にこんな冷静な判断が出来るのは自分でも驚いている。だが人間こういうときにこそあわてふためくことは少ないのかも知れない。

とにかくこの世界の状況は元の世界とほぼ同じのようだ。あのニト帽のやつも気になるがとりあえず学校へ行かなければ・・・

遅刻する。

「おう文ー！おはようさん！」

「うわ！？」

クラスメイトの吉崎鋼治よしきこうじが話し掛け いやつきとばしてきた。

「この・・・！毎度懲りない奴だ！」

こいつは一言で言えばムードブレイカー。空気をぶち壊す男だ。俺はいつも通り魔法で吹っ飛ばそうと手の平を吉崎に向けた。

・・出ない

「ん、新しいネタか？微妙だな・・もうちょっとポーズ改善したほうがよさそうだけ。」

「あ、ははは。やっぱ？」

「よっしゃいくぞ！講義2分前！」

「こら馬鹿ちよっかい出してないで教えろ！！」

「無駄なポーズ決めてたお前にも非がある！！」

魔法が使えない わかっていたことでもいざ実感すると違うものだ。

いままで誰もができた、常識の範疇にあつたことが今はどこにもない。

・・不安にもなるさ。きつと誰だって、さ。

一日目

単位の危ない俺達は間に合わなければ洒落にならない。もちろん全力疾走である。

キーン・・コーン・・カーン・・

『せー・・！』

・・・コーン

「アウト。」

すぱりと言い放つたのは扉に一番近かった女子生徒。こいつは・・

「お前ら二人。いい加減に間に合わせてこないとやるもんもやらんぞ。」

紹介しようという所で先生の声と生徒の笑い声が響いた。

「え・・勘弁してよ梶野さん」

「本内はともかく吉崎は常習犯だから駄目だな。」

「えー！差別よくないー！」

ふたたび笑い声が響く、ざまあみる。

「どうも、すいませんでした。」

「よろしい。見習え吉崎。」

「だー、なんで俺が悪い見本にされるのさー！」

「そう思うなら先生に敬語使えよ。」

女子生徒の隣に座っていた男子生徒にさらりと言われる吉崎。あ、露骨に嫌そうな顔した・・

「吉崎も懲りないな・・。」

さっきの男子生徒、春日井忠かすがいただしが言う。皮肉屋で素直じゃないことしかこいつの性格はどうも読めないんだが、ある友人いわくなんとなくおれと似た雰囲気を持っているらしい。まじかよ。

「・・春日井にもあるだろー？そんなくらい。」

「ないね、俺には。」

吉崎の発言をさっぱりと受け流す様ももう見慣れたものである。

・・？何だか今日は違和感を感じる・・。

「確かにお前にはなさそうだよな。吉崎と違って。」

「文ーも今日遅刻したじゃねえか！」

「今日だけだろ？おれの記憶に狂いがなければな。」

・・うーん。

「にしてもぶんたが遅刻なんて珍しいよね。何かあったの？」

こっちは西城詩織さいじょうしおり。おれたち4人のグループのうちただ1人の女だが紅一点なんて言わないぞ。ちなみにこいつは軽度だがゲームヲタだ。

「いやちよつと魔法が・・な。」

「おー、あんたに今貸してるゲームのなかの魔術師に催眠術でもか

けられたのかなー?」

「えっ・・・!? あ、うんそーそー。うまく魔法避けが発動しなくてな!」

ああ、つかえが取れた。

かわりにさらに強い違和感がおれを襲う。

「要はゲームをやりすぎて睡眠不足なんだろ、阿呆。」

「あー西城って女の割には色々ゲームやるよな・・・俺と普通に張り合いやがるし。」

「吉崎ー、女の子はゲームやらねーなんて偏見だぜ。」

「言葉遣いも荒いしな。」

「こ、これはわざとだ! 真似だもん、真似てたら慣れちゃったんだもん!・・・それにしても、テレビから魔法ってかかるんだ。」

「お前が現実と妄想の区別もつかないようにな。人の話も聞かないし。」

し「っ、つけてるもん。」

そう、学校も時間割から魔法関連の授業が抜けている以外何の変わりもない。いつも通り平和だし見事になにもない。

”魔法関連の授業が抜けている”以外は。

改めて魔法がない 自分の世界ではない ことを実感させられた。思えば忠がいつも吉崎にやる”口封じ”を今日は見ていない。・・・  
そうだ、ここは俺の世界じゃないんだ。

じつはおれたち4人、何の因縁か陰謀か一日に受ける講座は全員同



になりやがって。」

「む、俺は魔法使いな設定か。文一のファンタシーワールドここにあり。」

あ  
「ぶんだ朝から魔法魔法言つよね。何、貸したのそんなにはまりこんだ？」

あ  
こいつらに言われて気がついた。あまりにもいつもの日常がありすぎて忘れて・・・

ああ  
いや、思い出さなっていたがここはおれの世界ではないんだ。数時間前に確認したはずなのに、頭がそれを考えることを拒んでいる。

何かを引つ張り出された感じがして 吐き気がした

「はまりこんだ？とかお前が言うな、お前が」  
精一杯のつよがりには自分を隠す為にしたに違いない。

「えー、せつかくぶんだも仲間入りかと思ったのに。」

「羽目を外して痛い目を見るようなだれかさんの仲間は大変だろうな。」

「あーあのとときの抜き打ちのことかあ。西城普段ロクに勉強してないから撃沈してたっけ。」

「ほじくり返すなー！それでも結構気にしてるんだぞー！」  
そんななか「っ」と腕を振り回す西城。魔法がないだけ安全である。

そう 魔法がないだけなんだ。

他の点は元の世界と殆ど変わらないのだからまだマシな話。

なんて考えられれば、どれだけ楽だろうか。  
でも。

「うわあーん！西城がいじめるうー！！」

「気持ち悪いよ成人男性」

「失敬な！俺あまだ19でい！」

「あらあら、1年間何を過ごして来たのかしらねー？」

「てめえが女口調つかうのはもっと気持ち悪いからやめやがれ！！」

「うわひでえー！！私だって女じゃあー！！」

「・・・騒がしいやつらだよな、まったく」

愚痴をこぼす忠におれが言う。

「でもお前は好きなんだろ？この空気。」

「いや？嫌いではないけど好きとも言えない。」

「っはは、おれちよっと安心したわ。」

「安心？」

「あいつらもお前もいつもどおりで、さ。」

お前らが夢まぼろしじゃなくて形のある現実でよかったよ  
春「は？」

思わず漏らした本音 ほぼ変わらない日常

これが、あんなにはやく崩れるなんてね。

何もない浮遊感。たまに「これは夢だ」って自覚があるときがあると思う。いままさにその状態だ。

「よー、どう？慣れたかな魔法のねえ生活はさ。」

「・・・気軽に挨拶するような間柄になった覚えはないんだけどな。そんな中でも（だからこそか？）奴は何の前触れもなく現れる。」

「そんな事言わずにフレンドリーにしようぜえ？ぶーんちゃん。」

「おれは”ふみかず”だ。アンタこそひとをパラレル世界に連れ出しておいて、しかも名前も言わずにフレンドリー？なめてんのか。」まさになめきられている。夢から目が覚めたらいきなり現れた不法進入者にわけもわからないまま異世界に飛ばされ、なんの説明もなく生活の一部分を削がれたまま生活させられた。更にその飛ばした張本人は現れても何の弁解もせず馴れ馴れしくしてくる。・・・こんな目茶苦茶な話はないだろう。

「ありや、名乗ってなかった？そーだなあ。”ニット帽の願い事代行人”。」

しかもふざけたことをまた口走り始めた。

「馬鹿だろあんた」

「おいおい誰に名乗っても同じ反応かよー、結構気に入ってるのになあー。シヨックだなー。」

「・・・こいつと話していたら塚があかない。そう本能で悟ったおれは、さっさと本題を訪ねることにした。」

「で？人の夢にまで出てきて何の用だ？」

「あれ、夢ってわかってんのに俺と話すわけ？ぶんちゃん変わってるねえ。」

「夢入りの魔法なら得意分野だったからな。いまさら驚くもないさ。」

「ククク、『だった』かあ。わずか一日でもうすごい慣れてないか」

「？」

「茶化してないで用件を言えよ、ニットさんよ。」

挑発に乗ってたまるか。話しを長引かせたくないので再度用件を訪ねたらニット帽は俺に歩み寄ってくる。

「ニットさん・いいねえ、それ。次からそれ使わせてもらうかな。」

そう奴が言い終えた所で背筋が凍り付く感覚がした。

それまでずっと作っていた笑顔を解いて目を開いたのだ。恐ろしいほどに冷たい目を。

「用件は『夢』だ。」

「・・・夢？」

ニット「虚像のようで嘘ではない　なかつたことだが経験していること、ありもしない幻想に身を委ねた人間の第二の現実。」

「何が言いたいんだ？」

正直言つて意味がわからない。おれが素直に述べると開いていた目を閉じてにかりと笑顔を作り

ニット「自分で考えな。」

意識はここで飛んでしまった。

文「おい　！」

跳び起きても勿論誰もいない。あいつが入り込んで来たの今回は部屋に不法進入じゃなくて夢だしな・・・。

文「くそっ、都合のいいところで切りやがって。何だったんだよ。」

夢　変な謎解き残しやがって。

今日の講義は手付かず決定だ。

## 二日目

いまは俺達に放課後を伝えるベルも耳障りに感じる。結局朝の謎は解けていないからだ。

「で？どーしたのよ今日よお。お前ずっと考え事してたろ」  
まあ今日も学校を終えてたむろしているわけで。けして鮮やかではない紅の一点、西城は今日はバイトが入っているとかが。

「……あれ、バイトしろって言われてたの昨日だよな？たった一日で仕事に就けるのか……？」

文「今日なにかあったかかってねえ……。夢、かな。」

吉「夢？」

文「あーいや、やっぱいい」

忠「昨日も言ってたよな？夢がどうしたんだよ」

文「いや言つた覚えはないんだけど」

忠「『お前らが夢じゃなくてよかった』なんて言っただけか？」  
いやたしかにそれも考えてはいたが魔法のないこの世界で心を読んだならこいつは何者だ。

文「俺は『お前らがいつもどおりでよかった』っていったんだが。」

忠「……悪い、俺の記憶違いだ。」

いやいやいや間違いのわりには心理読みすぎですよ春日野さん？  
吉「記憶違いじゃねーだろ。お前が夢発言したとき文一のやつピタリ賞顔してたぜ。」

忠「……なんとなくそう思ったただだよ。ちなみにいまバカの考え  
てることは『腹減った』。」

吉崎「お前超能力者か!？」

忠「なるほど、吉崎はバカだそうだ。」

吉崎「??？」

分かれ吉崎。お前はカマかけに引つ掛かったんだ。

文「まあ、いいさ。忠が読心じゅ　心を讀むことができてもな  
んでもおれ達にできる芸当じゃないんだから。」

吉崎「なあ。何で読心術って言いかけてわざわざ言い直したんだ？  
しまった、こつちにも読心術はあったのか・・・！

魔法で読めないのだから別の方法なんだろうが・・・まあいい、こつ  
ちのことはそのうち聞き出してみるとして

文「バカにも分かるようにな」  
ナイスオレ。

吉「何だとこいつー！」

忠「ふふ。落ち着けよ、バカ。」

吉「があああああ！！」

！？

歩きながらある一点にさしかかった所で大きな違和感を感じた。

吉「ん、どした文ー？」

文「・・・すまん、おれ今日は先に抜けるわ」

最低限のことだけしかいえずに走り出す。どうしてだ・・・？どうし  
てここに　！

吉「おい！どうしたんだよ！」

忠「大分焦って見えたな。」

吉「ったく・・・今日の文ーはやっぱおかしいな。後追うぞ忠！」  
忠「はいはい。」

さつき感じた違和感は”間違はなく魔力だった”。方向はこの裏路地の先・・・でかい力が唸りを上げている。

(これだけの魔力がもともたあればこの世界に来た時点で気付く・・・つまりこれは『今さつき』生まれた力だよな。)

嫌な予感しかしない

でも逃げることは許されない気がする

行くしかないのか

裏路地を走り抜けた先にあったのは古びた立体駐車場だった。もう使われていない場所らしい。

「はあい、気付いてくれて嬉しいぜえ？ぶんちゃん」

「あれだけの魔力垂れ流しにしておいて何言ってるんだ。誘う気満々だったろ。」

「あらバレちった。」

「この際俺を呼び出したことはどうでもいいから質問させる。どうして俺をここに飛ばした？」

「ぶんちゃんがぜーはー息切らせて走ってきたんだろ？」

「違う！この世界にだ！」

「わかってるよ〜ん」

こいつは真面目に会話する気があるのか。

「理由ねえ。俺あくまでも”願望代理人”を自称してんだぜ？だとしたら仕事は一つじゃねえの。」

「おれは魔法がなくなればなんて考えたこともないぞ。」

「じゃあお前のじゃないかもな。」

は？

「それはどういう・・・」

「続きはこいつに勝てれば話してやるよ。」

ニツト帽が指を鳴らすとまた門が現れて

中からゲームや漫画でしか見たことがないような怪物が現れた。

「お、おい・・・なんだよこれ」

「モンスターがいる世界から連れてきた。つええぞー、気抜くと裂かれっぞー」

怪物の爪は容赦なく振り下ろされてくる。勿論今おれには逃げないがいの選択肢がない。

「うわ！？魔法もないのにどうやってこんなの攻撃を防げって・・・！」

「ククク・・・」

「シャレにならねえ・・・」

DAY 2 #2 (前書き)

二日後編。前回の続きです。

DAY 2 #2

目の前の怪物は俺達からすればTVゲームやマンガの中にしか存在しない化けもんの上に神話にでてくるような奴でもない。つまり攻略方も弱点も分からない、マジでどうしろってんだ・・・！

「くっそ！」

頭の中で盛大に愚痴を零しながら蹴り飛ばす。何の反応もない。

「これならどうだ！」

転がっていた鉄切れを持って殴ってみる。効いているそぶりはない。

「あーもう！初戦闘からラスボスと戦ってるようなもんじゃねーか  
ー！！！」

「ほらほらー、一発でも食らえば即死だぞー。」

何か聞こえたがむかつかついている暇はない。あいつの言っていることはまぎれもなく事実っぽいわけだ。

必死に逃げるしかないおれだった。

「気付いてくれんのはいつかねえ。ククク・・・」

「文一のやつ、たしかにこっちにきたよな！」

「さあ、どうだろう。」

「やる気あんのかてめえ・・・」

「お前みたいに熱くなれないだけさ。」

「くそ・・・路地裏に行ったって何もねえだろうに。何焦って行ったんだ。」

「どうし」

「おい・・・何だありゃあ。」

「・・・驚いた。」

「・・・文一！」

「よ、吉崎・・・！？それに春日野まで！」

いるはずのない二人がいた。そっちに気を取られて  
「馬鹿、あぶねえ!!」

振り下ろされる爪と飛び出した吉崎にまで気が回らなかった。

吉崎に突き飛ばされ、おれが元いた場所にコンクリートの白煙が立ち上る。

『吉崎!!』

おれと忠は叫ぶしかなかった。

「くそっ！予想外だった・・・！」

焦るニット帽の音が聞こえるがおれはそれどころではない。

「吉崎！返事しろ！吉崎!!」

煙が晴れた　そこには

「!!!!」

「・・・へえ。こいつはまた予想外だ」

そこにはうずくまった　無傷の　吉崎が震えていた。

怪物はそんな吉崎に何度も爪を打ち付けるのだが、吉崎には届かない。何故かは簡単なことだ、どうしてか吉崎に保護結界の魔法が張られているんだから・・・

「うわああああ!!」

吉崎はパニックを起こして動けない。触れれば殺られかねない爪が寄って来ては音を立てて弾かれていくんだ。そりゃあ想像しただけで怖い。

「おい本内。吉崎の回りを淡い膜みたいなのが覆っているように見えるんだが・・・あれは何だ？」

「魔法」

「・・・なるほどね。」

そうか　！ニット帽が作り出した魔力エリアのおかげでここでは魔法がつかえるのか・・・！

「気付いたみたいだな。ぶんちゃんのために作った魔力だけと思わぬ方向で役に立ってよかったよ」

「人の友達殺しかけといてよく言うな。」

「今はその友達を心配したらどうよ。練習も積んでないんだ、あんなその場しのぎすぐに壊れるぜ？」

「忠告どうも。」

そう言いながら吉崎の救出に向かうことにした。

「ククク・・・まあ行くのはいいけどな。この平和な世の中相手を攻撃するための魔法なんて習うことなかったらー？どう戦うのかねえ？」

「残念、伊達に西城のゲーム癖に付き合わされてねえよ。」  
生き物に試すのは初めてだけどな・・・！

手をかざして手先に神経を集中させ、周囲の空気から魔力を吸い寄せる。勢いをつけるために怪物の近くまで駆け寄り、その間に魔力を摺り合わせ・・・

「喰らえええっ！」

魔力同士の摩擦により発熱した魔力は怪物にぶつかった衝撃で爆発を起こした。

そのたったの一撃で雄叫びを上げながら消えていく怪物。あっけなさすぎないか・・・？

・・・あれだ、きつとおれが強いわけじゃなくて怪物が弱いやつだったんだろ。言うなれば序盤技も覚えていないのに一人で戦闘してスライムにやられかける勇者みたいなものだ。

「ひゅー、一撃かよ。」

ニット帽は余裕着々の表情をしている。こいつ絶対緊張を知らないタイプだ。

「さあ約束通り教えろ。あんたの目的はなんだ。」

「そうだなあ・・・世界の救済？」

「いいかげん人をなめた態度やめたらどうだ。」

「マジマジ大マジよー。」

「本気には聞こえないね。」

「でも他に言えることねーし。」

「・・・なあ、金髪さん。」

それまでなにかを考え込んでいた忠が口を開いた。何か考えがあるのだろうか？

「ん、どーしたんだい黒オーラ君？」

「聞きたいことは沢山あるんだが・・・あんたは何処の人間だ？」

「アメリカとでも言っておこうか？嘘だけだ。」

こいつは一度社会勉強をするべきだと思う。

「・・・聞き方が悪かったな。どの世界の人間だ。」

！？世界だって！？

「・・・驚いたな。ここの人間は異世界なんてないってのが常識だと思っただけだ。」

「あいにく俺は例外でね。一般常識なんて通じないよ。」

そっぴいえばあいつは俺が魔法だと呟いたとき確かに何の戸惑いもなく『なるほどね』と言いつつ・・・何者なんだ、こいつも。

「まあいいや。答えてやろうかな？」

どの世界の人間だって言われても、俺人間じゃねーもん。

「さて、お前はは謎を残しすぎなんだ毎回毎回！せめて前のを解くまで待つとかできないのか！！」

「落ち着け本内、金髪はもう消えてる。」

確かにニット帽はすでにいない。だが・

「春日野も！お前も何者なんだ！？」

「お前らと同じ、普通の人間さ。」

「普通の人間だったらおれを普通とは呼ばないと思うぞ？」

「・・・長くなるからまた今度話すことにするぞ。吉崎をほっとくわけにもいかないだろ。」

振り向いた先には白目を向いて硬直した吉崎がいた。・・・あー、このアホ面をみてるのと妙に冷静になる。

「お前の爆破を見てシヨツクのあまり気絶したんだな。あんな化物の前に飛び出といてこのざまか、バカ。」

「そっか・・・吉崎が出てきてくれなきゃおれ殺されてたかもしれないんだな。」

「そのことだが、なんでお前が命狙われてんのかはしらないし魔法なんて代物があつかえる理由も興味ないけどな。」

さっきおれが言った『殺されてたかもしれない』。その一言で忠の顔が真面目になったような気がした。

「一人で気張って無茶苦茶するな。このバカにすら使えたんだ、俺だって役には立てるかもしれない。」

そう、問題のひとつはそれだ。

この世界にはもともと魔法が存在しないのだからあんな防壁を作るそれなりに複雑な魔法、この人間が練習なしに使えるはずがない。たしか元の世界での吉崎も防御系統の魔法を得意としていたがそれに関係があるのか？

「あー、悪かった。おれの問題だから巻き込んだらややこしくなるとおもったんだ。」

命狙われる理由はおれもしらないが。

「もう充分にややこしいけどな。」

「・・・このことは他言無用で頼むわ。」

「ああ、わかった。」

「ていうかふと思ったんだけどさあ。」  
「？」

「お前、西城がいないと素直になるよな。」

「だーかーらー！見たんだって、でっかい怪物を文一が手から気を出してどかーんと倒してたんだって！！」

「鋼治・ついにおかしな電波にでもやられたか。夢と現実をはきちがえるなんて。」

うん、今は以外と常識人な西城に感謝だ。

「西城、それは失礼だぞ。」

忠が人をかばった！？

「んあ？」

「こいつの名前はバカだ。人の名前を間違えるな。」

「あー、なるほどっ。」

・・なるほど。

「てめえらあああ！！」

さて、一問答起こしていた間に西城のバイトが終わる時間になってしまったので4人で集まって夕食を取っているわけだが。

「吉崎、飯食うときぐらい静かにしたらどうだよ。」

「っけ！なんだなんだ文一までグルか！いーもんいーもんやけ食いだ。店員さーん！！注文！！」

「ここはファーストフードなんだからレジに行け迷惑男！！」

「お前もうるさくなってるぞ。」

「う・・」

「まったくもー、ほんつとお前らはねえ。」

「お前が言つなマジで。」

なんだとー、と怒る西城。

こうして過ごしていれば俺の世界とは何一つちがわない世界。そんな場所であんな騒ぎが起きて事件にならないほうがおかしいのだが忠いわく

「人払いの結界かなにか張られてたんじゃないか？分からないけど。」

との分析だ。たしかにそうとしか思えないわけだが忠が何者かという謎は深まる一方である。

でも いまはこのひとときを楽しんでおこう。あの様子ならニット帽がまたいつ吹っかけてくるかわからないのだから。

それに、あの忠が『協力する』といってくれたことは素直に嬉しかったから変に疑うのは罰当たりだろう。

## DAY 3

校舎の屋上に小さなつむじとなつて風が吹きさらす。

「・・・おい、なんなのさあんたは。」

「暇だからな。」

やるきのない返事を返された。いつもながらこいつの考えはわからない・・・

「言いたいことはない、質問に答えるつもりもない？ だったらなんで・・・」

あんたは、おれの前にいるんだ。ニット帽。

## 三日目

今朝は夢に奴は出てこなかったからかだいぶ気分がいい。考えることが積まれるように増えていくのは困りものだが。今現在、大きく分けて3つだ。いや、もっと考えればまだまだ出てくるだろうが時間を浪費したくないので考えないでおこう。

まずは奴、ニット帽のこと。ゲートを開くなんて常識外れな魔法を平然と使用し、おれをこちらへ飛ばした理由は教えようとしな。怪物を呼び出しておれを襲わせたくせにその場所に魔力を溜めて魔法を使えるようにするなんて不可解極まりないこともやられた。始末したければ魔法を使わせる必要なんてないのである。いや、俺の始末が目的なのかもわからないわけだが。

次に、吉崎の魔法のこと。・・あいつは怪物に襲われかけたとき、無意識とはいえ魔法を使ってみせた。魔力さえあればこちらの人間でも魔法が使えると言うのだろうか？だとしたら、もしこの世界に魔力が蔓延したら社会的なパニックが起きるだろう。未知の力が全人類にいきなり開花するのだから そう考えると皮肉ながら使えたものが使えなくなったと言うのはまだ冷静でいられるわけか。

そして、最後の一つ。

「へえ、屋上に呼び出しね。・・。」

「質問に答えてほしくて、な。」

そう、忠だ。少しでも謎が残されたままなのは気分が悪いから、せめてと思って呼び出したわけだが

「俺そつちの趣味はないんだけど」

違う！果てしなく違う！俺にだってそんな趣味は毛頭ない。誤解するな忠、そつち方面の人間なんてそうそういるもんか！！！！

・・落ち着こう、おれ。

「・・いや昨日のことなんだけどな。」

「ああ、そつちな。」

はいはい、とやる気のない返事を返す忠。

忠自身のことについては言う気がなさそうだからおれのことをどれくらい把握しているのか聞いておくべきだろうか？返事で確信を得られるからだ。

「おれのことについて、どこまで知ってる？」

「この学校にはいつてからのクラスメイトでいつもの4人組の一人朝に弱くて吉崎と一緒によく遅刻滑り込みをする。」

「おれが聞いているのはそういうことじゃな。・・。」

「昨日の様子を見るに異世界の住人、か？」

！！ やっぱりだ、やっぱり忠は他の人が知らない何かを知っている。・・！！

「お前は・・・」

「俺のことは時期が来たら話すよ。昨日同じようなこと言ったばかりなのにせっかちな。」

「でも・・・!」

「それじゃ、また明日。」

踵を返して去って行く忠。まだまだ質問出来ることはあつたはずなのにいざというときには何もでてこないもので。

「あーあ、逃げられちゃったなあ。」

!・・・背後から聞こえた声は間違いなく

「よ、ぶんちゃん」

ああ、お察しの通り。『奴』だった。

「心臓に悪いからいきなり出ないでくれないか?・・・まあ、ちょうどいいや。聞きたいことがたつぷりと」

「あー見物人だから俺。」

「・・・」

やっぱりだ。やっぱりコイツの考えは読めない。

「じゃあ何だ?何か謎でも増やしにきたのか?それとも・・・」

「いや、どんな調子かなーって見に来ただけだぜ。」

校舎の屋上に小さなつむじとなつて風が吹きさらす。

「・・・おい、なんなのさあんたは。」

「暇だからな。」

やるきのない返事を返された。いつもながらこいつの考えはわからない・・・

「言いたいことはない、質問に答えるつもりもない?だったらなんであんたは、おれの前にいるんだ。ニット帽。」

そして今に至るわけである。

「もうすぐ文化祭らしいなーここ。」  
駄目だ、意思の疎通をする気がないらしい。

「学校の予定なんかより俺のスケジュールが知りたいね。」  
「あついまのうまい！」

どこをどう聞けばそんな感想が出てくるんだ。・・埒があかないので質問をすることにする。

「・・前、あなたは『願いごと代行人』で『おれの願いじゃあない』って言ってたよな。」

「・・・」  
「じゃあ誰の差し金なんだ。おれにわざわざこんなことをした奴は誰なんだ。」

「なるほど、ぶんちゃんも夢を忘れないタイプか・・」  
「そうだよニットさんよ。俺は手に入れた情報は逃さない。」

「少なくとも、ぶんちゃんはまだ面識のない奴だなあ。」

「そいつはどこにいる？」  
「まだ会わせられないね。」

さすがにそこまで聞き出すことは無理か・・でもこれで二つ、はっきりしたことがある。

「なるほど、『俺がまだ知らない誰か』の『依頼』であることは確かなんだな。」

「！」  
「カマかけてビンゴなんてこと、あるんだなあ。」  
「・・っははは！俺がしてやられたわけな！ま、滑らしちまったもんはしゃあねえか。」

奴はからからと笑った後、にやにやしなから返事をしてきた。

「その通りだけどな、それが知れたからってぶんちゃんは一歩も進んでないんだぜ？」

・・確かにそうだ。そして正論をたたき付ける奴ほど苛々する相手はいない。

「でも身内を疑わないで済むようになったってのはでかいんだよ。少し楽になった。」

忠とか　な。

「へえ、それはよかった。」

ニット帽が俺から離れる。・・だめだ、まだ聞き足りないことがいくつも！

「まあ、知りたければ今の生活を続けてればいいぜ。そのうち分かるさ。」

「おい、待てよ！」

そんな叫びも虚しく奴は消えた。

・・『待てよ』の返事はない。もうどこかに行つたみたいだ。

結局のところ根本的な進展はなかったが、邪魔な論を少しでも減らせたことを考えれば進んだと言えるよう。

・・日常生活、ねえ。こんな状態でどう送れってんだか。

あの誘導尋問の際にもっと情報をきいておけばよかったと今になって激しく後悔した。

どうすればいいのかわからない以上、悔しいがあいつの言う通り普通に過ごすしかない。情報が少なすぎるわけで、どれだけ考えても

答えはでてこないのだからどうすればいいのやらということだが。  
『依頼人はまだ会ったことのない人間』というヒントだけです。こ  
ちらの問題は手詰まりを示しているから置いておこう。次の問題  
はやつが残していった謎掛けのひとつ、『夢』だ。

”虚像のようで嘘ではない、なかつたことだが経験していること、  
ありもしない幻想に身を委ねた人間の第二の現実。”

今になつてもまだ意味がわからない。いや、厳密に言えば文章その  
ままの意味はなんとなくわかるのだが、これがおれとどう繋がるの  
かということだ。・・わかるやつがいたら全力で講義を頼みたい。  
今俺がいる世界が『夢だ』とでも言うのならこれほど俺にとつてい  
い話はなく、普通に生活してれば分かるという言葉の意味もわかる。  
夢はいつか覚めるからだ。こんなトンデモ話、夢に違いないなんて  
安直に考えられれば気が楽なもんだが・・そう甘いもんじゃない、  
当事者の俺なら言い切れる。

こんなリアルな夢があるものか。

結局結論に至らないまま帰ることにする。忠を呼び出すことは下校  
前から考えていたので、皆には先に帰ってもらっていたから久々の  
一人での下校になった。

・・まあ、久々というのはあくまでもおれの記憶の中の話なんだが  
と、こういうことにいちいちわだかまりを感じてしまうことが嫌に  
なってきた。どんなに些細なことでも魔法のあるなしだけで変わっ  
てしまう可能性があるわけだ。・・例えば1週間前、おれが魔法の  
実践講義で大ポカをして一人だけやたら長く学校にいたわけなんだ  
が魔法がないこつちの世界では4人で帰っていたかもしれない。仮  
に他のことでミスをしていたにしても、事後処理にそう時間はかか  
らないだろう。化学の実験で大爆発でも起こさない限り・・ああ、

もしかしてこつちのおれはそれをやらかしたんだろうか。シリンダーの中の水を爆発させるなんてこと、魔法じゃなくても簡単に起こり得るじゃないか・・・。

少しでも動きがあることを期待して、いつもより遠回りのルートの帰り道を歩く。脇に見える裏路地では猫がゴミバケツの主導権をめぐっているのだろうか？3匹ほどが荒い息を立てて争っていた。敗北して逃げ出した一匹を意味も無く追いかけてみる。こういうとき、何の意味も持たないものにも縋りたくなくなってしまうのは何故なのか。小道に入り、生まれ持ったバランス感覚を器用に駆使してすい進む猫をふらふらしながら追うおれ。・・・正直、自分でも何をしているのかわからないが、ここまで追ってしまったら最後までやらなければという妙な使命感を持ってしまわないだろうか。きつと誰しも、ブロックや道路の白線の上だけを歩いてみて折角だから終りまで歩いてみようとか、夜眠れないからどれだけ長い間起きてられるか挑戦しようとか、やたらと長い魔術行使に挑戦していてやめるにやめられなくなったりとか、RPGの続が気になって貫徹したりしたことがあるに違いない。それと同じ感覚だ。・・・ちなみにおれはすべて断念している。

あるときは川に敷き詰められた大きな石を渡り、またあるときは草むらをつきぬけ、さらには落ちたら大怪我をしそうな狭い足場を渡ったりしたが、やがてコンクリ塀を飛び越えて民家に入ってしまったので結局そこで断念し、『やめるにやめられなかった伝説』に新しい項目が増えた。不法進入でこたごたは御免なわけだね。

半分わかってながらも当然の如く何もないと少し萎えるんだが・・・珍しく今回は当たりだったみたいだ。猫が入った民家から振り返ったとき、向かいにある喫茶店から微量だが魔力を感じたのだ。

こんな所にいったい何があるのか、その怪しさにおれは少し迷ったが、チャンスが無駄にしない為にも喫茶店に入ることにした。

「いらつしやいま・・え、ぶんた？」

女性店員が挨拶しにきたみたいだが、いきなり妙なあだ名で名前を確認された。・・いや、回りくどい話し方はやめよう。どうやらこの店は西城のバイト先だったらしい。

「何だよ、お前こんな場所でバイトしてたのか？」

「あはは、悪いか。」

「悪い悪くないじゃなくて・・交通とか不便じゃないのか？駅前からは相当離れた場所のはずだけど・・。」

「ここは君の学校とは隣の町だよ。」

落ち着いた声と共に男が出てきた。おれと同年台か少し上ってところだろうか、まとまった顔立ちをしている。一番目についたのは髪が白いことだが、年から考えて染めているのだろう。・・普通ならセンスを疑う所だが不自然なほど純白の髪が似合う男で、一種の『何か違う』雰囲気も持っていた。

「え、何あんた此木からここまで歩いて来たの？」

「あはは、悪いか。」

なんとなく返してやった。

「おおかた猫でも追いかけて来たんじゃないかな？この辺の猫は此木町にもお出かけするからね。」

「うわあ、ぶんた可愛すぎだろそれ！！」

勝手に行動を予想され、まだ反応もしていないその答えで西城はげらげらと笑い始める。・・正解だから何も言い返せないけどさ。

「西城、その人は誰だよ？」

「あー、この店長さん。若いでしょー。」

「どうも、狩侯です。よろしく。」

「あ、本内です。」

狩侯と名乗ったその男は握手を求めるように手をのばしてくる。今の時代初対面の挨拶で握手をするというのは公の場や仕事相手等だけだと思うが・・、求められたら答えるのが礼儀だろう。むしろ拒むのはマナー違反だ。

「成程、たしかに素質がある。」

「え？」

「ついてくるといい。」

素質って・・・なんだ？意味深な言葉を吐き奥へ入って行く狩俣さん。「ぶんた、あの言葉は多分店長さんの売り文句だから気にしないで俺もいわれたからさー。」

「なんだよ、真に受けて損したなあ。」

「でも店長の占いはよく当たるんだよー？ほら、奥行つといで！」

「は、占い？」

ぐいぐいとおれを押す西城に無意識に体が少し抵抗して足をつっぱらせる。話から察するに、狩俣さんがさっき入っていった奥の部屋でおれが占われるってことだろうか。こいつやけに楽しそうな顔をしてるけど・・・大丈夫なのか、その占いつて。

「ま、俺も最初にここきたときやつたから大丈夫だよ。ほれほれー、あんまり遅いと店長に迷惑だよー？」

「わかった、わかったから押すな！」

あの人の雰囲気もどこか気になったので、取り敢えずおれは店の奥へ入ってみることにした。

カウンター裏の扉に入ると、厨房・・・というより、台所に続いている。廊下のような横長の通路の壁際にコンロやまな板の乗った流し台があるのだから台所で間違いないだろう。ちなみに向かいの壁には冷蔵庫があるが、さすがに他人の家（？）にある冷蔵庫の中身を勝手に見たりはしない。

台所を抜けると廊下が続いていた。なんというか、風呂場もトイレもあり居間もありで喫茶店の裏とは思えない程モロに普通の家だ。一般家庭に店がくつついているのはよくあるが、それがこういう喫茶店となると何となく意外である。先入観と言うやつだろうか？歩いていると突き当たりに『応接間』とマジックペンで貼り紙されたドアが半開きになっていた・・・ここだな。おれは軽くドアを開け、

部屋の中に入った。

部屋は応接間とは名ばかりで、フローリング張りのいたって普通の居間だ。部屋続きになっている和間に正座していた狩侯さんはおれに気付いたみたいだ。

「調度準備が整ったところだよ。」

座っていた狩侯さんが立ち上がり、おれを椅子へ誘導する。かけてという言葉でおれは椅子に座ると、机の上を見渡すが目立ったものは見当たらない。占いじゃあないのか・・・？

「あの、西城に狩侯さんは初対面の人に占いをするって聞いたんですが・・・違ってますか？」

「ああ、詩織ちゃんからもう聞いていたのか。それなら話は早いね。」

「どうやら本当に占いを始めるらしい。占い道具とかは見当たらないんだけどな・・・手相占いか何かだろうか？ちなみに説明しておくとおれの世界の場合は占いに魔法を使ったりはしない。あくまでも運試しの代名詞、当たるも当たらずも八卦の本人次第というわけだ。」

「じゃあ、ちよっと手を出してくれるかな？」

おれはいと一度頷いて手の平を見せると、狩侯さんはそれに軽く手を添えた。やっぱり手相占いだっただか

「観せよ彼の物の煌き、手より伝えその姿。」

・・・嘘だろ？こっちの世界での占いは 握られた手から感じたものは、紛れも無く魔力だった。こっちの世界での占いは魔法を使うのか・・・？

「あ、あの。これは？」

「何かを感じるかい？」

「ええ、まあ・・・」

そりゃあ感じるさ。おれにはよく慣れ親しんだものだ。・・・だから今はそれよりも狩侯さんの正体が気になって仕方ない。

「それはどんな感じかな？」

「魔力です。」

即答してみた。もしこの人が一般人で占い師は元々魔法を扱える世界ならば、よく知っているね程度で済まされる。もしこれが魔力ではなくまったくの別物かおれの勘違いであるなら奇異の目で見られるだろう。そして 狩俣さんは一瞬きよとんとして

「・・・驚いたな、君は段違いに特別だ。」

意味深なことを言い放った。そしてやはり魔力はこの世界になく、おれへの反応もそれなりのものであるのならこの人には何かがあるというわけだ。

どうやらおれの判断は正しかったらしい。

朝。それは一日の始まり。今の季節では清々しい秋風を肌で感じる  
ことができる時間・・・だがそれよりもおれは布団でぬくぬくしてい  
たいタイプだ。もちろん、春夏秋冬を通じて。

・・・今日は日曜日、折角の休みなのだから昼過ぎまではだらだらし  
て存分に休むついでに少し物事を整理しておこう。

これは、昨日狩俣さんと話したことの続きだ。

「段違いに特別・・・とは？」

「まあまあ、そんな険しい顔をせずにリラックスしてくれればいい  
よ。」

・・・そう言われても無茶な話だ、なんせおれの未来がかかっている。  
しかも得体の知れない相手の前でリラックスできるのは忠ぐらしいの  
ものだろう・・・、少なくともおれには無理であることに間違いない。  
おれはそれを狩俣さんに視線で示した。

「はは・・・確かに無理があつたか。君にとっては重大な問題かもし  
れないからね。」

「かも、じゃあなくて重大なんです。」

間髪いれずに返答を返したら、狩俣さんはまた顔をきよとんとさせ  
た。そして『やれやれ』といったジェスチャーを体で表すと

「それで・・・君は、どこまで覚えているんだい？」

今までよりもはっきりした声で、そう言った。

「え・・・」

何処まで覚えているのかって、どういうことだ・・・？さっぱりわか  
らないが、その記憶がおれを『特別』とやらにするものなのだろう

か。だとしたらそれは何のことだ？

「解りにくいようなら質問を変えようか。」

狩俣さんはまた表情を柔らかくして言う。険しさを解いてくれたことも解るように言い直してくれることも正直有り難い。

「ここ数日のことを遡って話してくれないかな？僕の知りたいことが出てきたらストップをかけるから。」

「え、ええ・・・わかりました。」

狩俣さんの微笑を合図に話をはじめることになった。

遡るということだから先ずは今日、学校までは日常そのままの内容だったので割合する。

昼食時に忠を見つけたので放課後屋上へ来るよう呼出しをかけたおき、実際に忠と話をした。忠はどうも何かの鍵を持っていそうだ。

「鍵？」

「えーと、なんていうか・・・おれのこととは別の、重要ななにかがあるそぶりをしていたので。」

なるほど、と狩俣さんが頷いたので続けることにした。

忠自身のことを聞き出そうとして失敗して・・・ニット帽が来たんだ。

「・・・ニット帽、か。それは誰のことだい？」

「わかりませんが狩俣さんは何か知っていそうな顔ですね。」

狩俣さんは見るからにすこし考えこんでいた。

「ちよつと心当たりのある人物がね・・・彼については後で話すから続けてもらってもいいかな。」

ようやく奴の手掛かりを得られる・・・！いてもたってもいられない気持ちだったが『続けてほしい』と言われてしまったのですこし我慢しよう。大丈夫、おれの話がおわれば聞かせてもらえるんだから。

「そのあと、吉崎に対しては何もなかったことにしておいて4人で夕食をとった後そのまま解散しました。」

「ニット帽に魔物・・・か。よし、初日はどうだったんだい？」

どうだったんだい、と聞かれても答えようがない。・・・だって、飛ばされたこと以外はなにもおこらなかつたのだから。

「ニット帽にこちらに飛ばされて、遅刻しました。」

「ん？・・・あつはつは！遅刻は確かに問題だなあ！」

狩侯さんは笑った。これしか話すことがないのだから仕方がないと可言えるが。

しかし狩侯さんはそのあとに表情を変えた。・・・この人は今、笑って”くれた”んだ。

「今、『飛ばされた』と言ったね。」

「え？あ・・・はい。」

「飛ばされる前のことは覚えているのかい？」

「あの、どういう意味ですか？」

「だから飛ばされる前だよ。飛ばされた日の前日、前々日・・・一週間前でもいい。」

「一応、忘れてることはないと思いますけど。」

ニット帽に飛ばされたら記憶が無くなるでも言うのだろうか？もしそうだとすればおれにその症状が見られないから特別なのか・・・？

「飛ばされる前はこういう場所にいたんだい？」

「どういう場所って・・・今と殆ど変わらないですよ。忠ぶつに言うなら異世界ってやつらしいです。」

まあ、おれから言わせてもらえば今いるこつちが異世界なわけだが。

「・・・その異世界と今君がいる世界には何か違いがあるのかい？違いがあるから異世界なんだろう？」

「・・・なんとなく、狩侯さんの意図がわかってきた気がする。」

「・・・魔法があります。それ以外はこちらと何一つ変わりません。」  
そついうと狩侯さんは一瞬驚いて

「やっぱり、君は間違いないく特別だったね。」

そんな言葉に続けてさらに話をしてくれた。「魔法世界の住人なら『門』っていう魔法の名前ぐらいは知っているだろう？君が使われたのはこの類の魔法だ。本来なら『門』を使って異世界へ移動した

者は」

「記憶を失う、ですか？」

この仮説があつているとすればやはりおれは異質なのだろう。教科書にも乗っていない高等魔法『門』。おれはその実体を異世界への扉を開くこと以外全く知らなかった。

「似ているけど少し違うよ。記憶を”書き換えられる”んだ。」  
一瞬、狩俣さんの発言が理解できなかった。記憶を・書き換えられる？

「まずは例をだそうか。例えば魔術行使には魔力や物といった何らかの代償が必要なのは魔法がある世界の住人ならほぼ共通の事実だと思う。・ここで重要なのは世界には自浄作用があるということだ。」

自浄作用・それなら知っている。小学校で習った基礎知識だ。・まあ、小学校で勉強した昔のことだから細かいことは覚えてないんだが。なんとなくわかっていれば大学の内容でも困りはしないからな。

「魔力を使ったら使われた分の魔力が沸いてくる現象でしたっけ・・地球から。」

「まあだいたいはそんな感じかな。今の話を聞くかぎり、『世界は常に自らを一定の状態にしようとしていて、自然を通じて失った魔力の補完を行う』。・じゃないかな？君の世界では。」

「あー・たしかそんな感じだったと思います。」  
あんな雑な説明でよくわかったものだ。もともと知識があつたと考えるのが妥当だろう・話ぶりからすると『自浄作用』にはほかにも種類がありそうな感じだった。

「これの『世界は常に自らを一定の状態にしようとしている』というところが重要なんだ。」

・小難しい話は聞いていてだけで嫌気がさすものなのだが、まだついていける話だけに言わんとしていることの想像がついてしまった。

「・・・なんとなく、わかった気がします。」

「ああ、きつとその考えは正解だ。・・・続けるよ？『門』は都合のいい魔法で、飛ばす先の世界に飛ばされた人物に対応する人物

同一人物とかかな。　が存在した場合、その人物としてそのまま送ることができる。・・・元いた人物の身体に魂を送り込んでね。」

「え・・・？」

つまりこの身体はこっちの”おれ”のもので、おれは”この身体”の持ち主じゃあないってことか・・・？それじゃあ、こっちの”おれ”は・・・

「自分のことよりも”こちらの自分”のことを心配しているのかい？・・・いい子だなあ。安心していいよ、門の選んだ『同一人物』なんだから魂は違和感なく溶け合って消えることはないんだ。」

・・・よくわからないがおれは殺人（？）は避けれたようだ、その点では安心できた。そのまま耳を傾けることにする。

「・・・そこまでのシステムは完璧だった。だけどその先なんだよ、門は『記憶の継承』まで辿り着かなかったんだ。」

「辿り着かなかった・・・？」

「ここでさっきの『自浄作用』が出てくる。門で精神を”同一人物”に送り込んだとするよ・・・世界にとって、その瞬間に”異質な原因で急激な変化を起こしたものはなんだい？」

・・・ああ、なるほど・・・な。

「その人の、記憶・・・。」

「そうだ。だから世界は元の状態に戻そうとして自浄をはじめめる。記憶を『正常な状態』に書き換えることによつてね。」

・・・正直、話が飛躍しすぎていて（あとダブルクォーテーションとカギカッコが多すぎて）よくわからないがなんとなくはつかめたつもりだ。そこでおれは狩俣さんに確認した。

「それで、おれはどうしてただ記憶の書き換えとやらが行われていない・・・ってわけですね？」

「その通りだ。あいつ、もしかして『門』の改良に成功したのか・・・

「？」

「あいつ、というのはニット帽のことか？心当たりがあるとは言っていたが知り合いなんだろうか。だとしたら狩俣さんとニット帽にはどういう関係があるんだ・・・？」

「あの、狩俣さん。『あいつ』っていうのは・・・？」

「おっと、すまない。僕の古い友人のことだよ・・・多分君が聞きながら知っている『ニット帽子』とは別人だから今は気にしないでくれ。」おれの考えを読んだかのように狩俣さんが返答する。・・・『あいつ』というのは『門』の研究でもしている人物なんだろうか？少なくともニット帽の使った『門』の話からでてきた人物であるから、ニット帽と繋がる人物であることは間違いないだろう。

「ありがとう、聞きたいことはだいたい聞けたよ。そろそろ『ニット帽子』の説明を・・・したい所なんだが、すまない。そろそろ閉店時間みたいだ。」

時計を見るともう9時になりそうだった。・・・喫茶店には結構遅くまでやってるんだな。ここは狩俣さんの自宅みたいだから居座れなさそうなこともないが・・・さすがにこの人にも閉店準備等があるだろう。仕方がないので昨日はそこで帰ることにした。

「定休日は火曜だから、それ以外の日なら時間があるときにいつでもおいで。続きはその時に話すよ。店は正午から開けてる。」

・・・こうしておれは回答を先送りにして今日を迎えたのだった。

#### 四日目

「よ、ぶんた。」

「この店は客にいらっしやいませの一言もないのか。」

そして正午すぎ、早速店へ来た。ていうかこいつが土日両方シフト入れて休みを返上しているという事実が以外すぎるんだが。

「金かせがねーと欲しい時に欲しいもん買えないからね。普段休日は沢山働いて発売日には休み貰ってるんだぜ？」

なるほど。・それはともかく、なにかカウンター席に人だかりができていた。

「あの集まりは何なんだ？」

「今日は日曜だからねー。開店から2時間のランチタイムに見世物があるんだよ。」

「見世物？」

「まー百聞は一見に如かず！千聞とてまたしかりっ！」

いわれて覗き込んでみると・・狩侯さんがグラサンに黒スーツでカードを弄っていた。

「店長の趣味なんだよ、マジック。」

・・えーと、これが例の『マジックショー』というものなのか？カードを引き当てたり入れ換えたりなんて魔法を使えば簡単なことだ・・。！、どうして狩侯さんはここで魔法を使えるんだ！？

「なあ西城、あれ・・魔法だよなあ。」

こちらの西城に問い掛けても無駄だったと言ってから気がついた。

「うんうんあの手捌き、魔法だよねー。」

何故か否定されない・・なんだ？マジックをする人間は使えて当然だとしても言っただろうか？

「いつか俺も習いたいもんだよー。」

「習えばできるのか？」

「こら、どーゆー意味だ。」

「どつって文字通りの意味なんだが。」

「・・ぶんた、最近忠がうつってきたんじゃない？」

なにやら発言の意味合いを勘違いされたらしい。反応から見るに習えはできることらしいが・・何かつじつまがあわない気がする。

「いつになつてもタネ明かししてくんないんだよ店長さ。『理屈が分かつたらつまらないだろ?』ってさー。こっちは毎週見てるんだからとつくに見飽きてるつての。」

西城が頭の後ろに手を組んで愚痴り始めた。狩侯さんは魔法の内容を公言していいのか。なら練習次第で誰にでもできると思つてしまつても仕方がないかもしれない。・・後で狩侯さんにちよこつと聞いてみよう。

狩侯さんは見世物が終わるとヒマなのか、店の仕事もせずにおれを例の『応接間』へと迎えた。本題の前にさっきのことを聞いてみると狩侯さんは普通に言つた。

「あつはつは！あれは魔法でもなんでもないよ。」

「え？いやでも明らかに透視とか転移とか。」

「透視のマジックはあらかじめ山を決まつた切り方でおいておいて抜いたカードを戻してもらつた時に切り方を工夫すればそのカードが一番上にくるからわかるんだ。まあ、細かいやり方は企業秘密だけどね。マジックにはこんな感じでタネがあるんだよ。」

本当になんでもないことだったらしい。・・なるほど、それなら西城の反応にめ納得がいく。

「さて、今日の要件はその話じゃあないだろう？確か・・昨日はニット帽子の話で終わつたんだつたね。」

そして話が切り替わつた。

「まず、彼は名乗りを上げるときに必ずある名前を言う。聞いているかい？」

奴の名前は忘れもしない。おれをこの状況へ送り込んだ張本人の言葉だからな・・。

「『ニット帽の願い事代理人』。」

「・・よし、人違いではないみたいだ。それじゃあ話すよ。」

少し間を置いて狩俣さんは話しはじめた。

「彼の仕事・・・というか、行動かな。それについては実は通り名の通りなんだ。」

「・・・通り名だけに、ですか？」

『通り』二つに強調点がつきそうなほどそこだけ強く言うものだから思わずツツコンでしまった。申し訳ないが正直・・・つまらない。というか、笑い所がわからない。

「ん・・・滑ったかな。まあいい、とにかくそのままなんだ。願望を抱えた人間の前に現れては願い事を叶えてゆく。」

「でもあいつ、そんなにいい奴には見えませんでしたよ。そもそもおれ願い事なんて抱えてないですし・・・」

「他人の依頼に巻き込まれた、と考えるのが妥当だろうね。」

・・・このことは話していないのにびたりと当てられた。それも確証もないのに一発でだ。普通に考えれば直ぐに出そうな結論だが、考える時間もなくて即答されてはさすがに驚く。

「行動については今話した通りだけど・・・飛ばされた君ならよく分かっていたかな。他に聞きたいことがあるんだろう？」

奴について知りたいことはそりゃあ山ほどあるが、いざ何かと聞かれると何も浮かんでこない・・・よくあるよなこういうこと。そうだな、まずは

「あいつは・・・何なんですか？膨大な魔力が必要だって言われてる『門』を手軽く使ったり、を何も無い場所に魔力エリアを作り出したり、みたこともないバケモノを呼び出したり・・・揚句には自分で『俺は人間じゃない』なんて言っていましたけど。」

奴自身のことを聞くことにした。まず、最初に知っておかなければならないだろう。

「そうだな・・・長くなるから詳しい説明は省くけど、僕等の言葉で言うなら『神』が一番的確かな？」

はい？今なんて・・・？

「・・・神？冗談でしょう。どうしてあんなのが神様なんですか？」

「神様にもいろいろいるのはよく聞くだろう？縁結びの神とか、商売繁盛の神とか、交通安全の神とか・・・」

「このチヨイスを聞くとあらためて喫茶店のマスターなんだなと思わされる。いかにもお客さんとの話題で出てきそうな神様ばかりだ。」

「そんなありがたいもんじゃないと思いますけど・・・」

「疫病神や貧乏神もいる。とにかく神と言うのは沢山いるものなんだよ。そのなかの一つとは言わないけど、人間とは次元の違う存在であるということは違いがない。」

「あー・・・まあたしかに奴は疫病神タイプだが。でも神というのは大きすぎる気がしなくもない。」

「まあ、『神』ってイメージだけで捉らえないでそういう感じのものなんだって考えてもらえばいいよ。・・・それに、あいつは元々人間だ。」

「元々、人間・・・？」

「人間をやめたんだよ、石仮面じゃないけどね。」

「・・・いけない。この人の話すネタはどこかズレている。ていうか、なんだか危険だ（色々と）。」

「人間をやめる・・・って、どういうことですか？」

「・・・彼には、『素質』があつたんだ。」

「『素質』・・・？そういえばおれにも言っていましたけど、何の事なんでしょうか？」

「聞けば戻れなくなるよ。」

「では、やめておきます。」

「まだ気付いていない奴がいたらあえて言うっておこう。おれは安全主義者だ。」

「即答・・・！？普通こういうことを言われたら悩んだ末に話を聞くものじゃないのかい！？」

「危険なことは嫌いです。」

「・・・なんだか今だけ作画がデフォルメされていそうな勢いだ。ムー

ドブレイクは吉崎の専売特許だったはずだが・・・どうやらこれは厄介なことにおれにも伝染していたらしい、それも知らないうちに。

「参ったなあ、冗談だったんだけど。」

「今のは笑えませんかよ・・・。」

狩侯さんは少し苦笑いをして、また話を再開した。

「素質っていうのは・・・体内での魔力循環ができる素質かな。」

「体内での、魔力循環・・・？」

また難しそうな単語が出てきた。今日はなんだか説明ばかり聞いている気がする。いや、話を聞きに来たわけだから当然なんだがこんなにいたらだと会話パートが続くと少し飽きてくる。ああそうさ、おれには緊張感なんてものないしそれに加えて飽きっぽいよ。

「普段君は魔力を周囲から摂取して魔法を使っているね？だから魔力のないこの世界では魔法を使えない。」

確かにその通りだ。さらに言うと溜めた魔力を”放出”するときのエネルギーで魔法が発生する。怪物に使った発火も要は放出した魔力同士の摩擦熱だ。一般的に言う『複雑な魔法』や『魔術行使の長い魔法』なんていうのは魔力量の調整が微妙だったり、必要な魔力が多いので長時間魔力を自分の周囲に集め、留めておかなければならなかったりするものだ。

「その溜め込んだ魔力を放出するとき、『素質者』はそれを霧散させないでそのまま自分にリターンできるんだ。」

「そんな事、可能なんですか？」

「君の世界の人間は『素質』を持っていないようから不可能だと思っうが・・・君やニット帽子は可能だよ。」

どうにもそんなこと考えられない。俺の中の一般常識が一瞬にしてひっくり返されたんだから当然だ・・・だけどだ、少し冷静に考える。おれは

「『素質』の使用用途は分かりました。それで、結局『素質』って何のことを指しているんですか？」

まだ『素質』とやらの正体を聞いていなかったわけ。

「1つは、ある程度の魔力を溜め込めるだけの容量があるかどうかだ。ええと、君の世界での魔法は使う時に必要なだけの魔力を集め、自分の体を通すことで放出のエネルギーを作るんだらう?」

「はい、そんな感じですかね。」

「ここでわかりやすいように例に出すと・・・君はテレビゲームはやるよね。RPGで言う『MP』がそのまま一つの素質と同じ意味になる。」

「・・・MP、ですか。」

それはゲームバランス上無限に使用できないようにするリミットの役割じゃあないのか?少なくともおれはそう考えてきたんだが・・・君の世界の人間は生まれつきでMPが0なんだよ。だから周囲に必要な魔力が存在し続けられない限り魔法を使うことができないんだほら、ゲームでもMP0の戦士も魔力の宿った武器を使えば魔法に似たことができているだらう?」

なるほど、と思う。この例はおれには分かりやすかった。つまり・・・MP・・・『素質』があると一度留めておいた魔力を自分の体に残せるというわけですよね・・・あれ、ですけどそれだとどうして使った魔力をまた自分に戻せることになるんですか?」

「それが2つ目だよ。そっちは体質の問題なんだ、それもあある一定の条件下でその体質を持った子が産まれる。」

「条件?」

「本来『素質』を持たない人種から素質持ちが産まれると、魔力循環の才能も一緒に持ち合わせてくるんだ。」

「・・・おれがそれである?」  
にわかには信じがたい話だ。そもそも素質持ちが産まれる原因も何も知らないのだからそんなことを言われても納得なんてできないのが当たり前の話だらう・・・考えていると狩俣さんがまた思考を読んだように続けた。

「素質持ちが産まれるのは単純に突然変異の一種なんだ。ほら、尻

尾のある子供とか指が6本ある子供とかが昔取り上げられていただろっ?」

「・・・そういう例で出されると喜ばいいのか怒ればいいのかすごく複雑なんですけど。」

「でも、そこまで産まれないってわけじゃないんだけどね。これは憶測だけど、だいたい100人に一人ぐらいは素質を持っていると考えていい。」

「え・・・?待ってくださいよ、それじゃあかなりの人間がその素質持ちとやらってことじゃないですか?」

「そうなるね。」

これは何か矛盾してないか・・・? そうだ、それだけの人間がいるのにどうして誰ひとりとして魔力の循環ができるという話がないのだろうか。そんな大きなこと、テレビ番組とかで取り上げられていてもおかしくない・・・超人コンテストとか。

「おかしいじゃないですか? そんなに居るならどうして誰もできないんです?」

「できないんじゃない、気付かないんだ。君の世界には常に魔力があるだろう? 循環させる必要がないんだから、外の人間にでも教わらない限り気付くわけがないさ。」

「あ・・・」

言われてみればそうだ。そりゃあ無意味なことは探りもしないのだから見つかりもしない。誰も知らないのだから思い付きもしない・・・もしも独学で考えついて実際に証明してみせれば間違いなくノーベル賞ものである。ノーベル賞の基準はわからないが多分。

「つまりこれは、条件は体質的なものではあるけれど使うには手順が必要・・・ってわけですか?」

「ああ。少なくとも練習なしに使えるものじゃない。」

「・・・あれ? 少し待ってください。素質があることと”ニット帽が人間をやめたこと”がどう結び付くんですか。」

よくよく考えればまったく結び付かない。MPがあって魔力循環が

できるからと言って何がどう人外と繋がるといいのか。

「・・・少し、長くなるよ。」

「もう十分に長いんでこれ以上増えても変わりやしませんよ。」  
狩俣さんはまた苦笑してみせた。

ここからはファンタジーの話だと思ってくれ。

昔、ある町に青年が住んでいた。

その青年は『素質』を持っていて、道具なしでも魔法が使えたんだ。

道具？

この世界にも魔力がなくてね。かわりに魔力の宿った道具があつて、魔法にはそれを使っていたんだ。

そんな特別な力を持つ青年を町民は『素質者』と呼び讃え上げていた。青年はそのお祭りぶりに嫌気がさしたらしい。町から逃げ出した。

最初は新しく住む場所を探しに行った青年だったが、色々な物事を繰り返してある少女と出会う。

青年はその少女の願いを聞き、叶えようとして・・・。

彼は膨大な魔力を使う魔法を自ら発動した代償に、人間としての身体を失ったんだ。成長もそこで止めたんだよ。

えーと・・・どこからどう解釈すればいいのだろうか。とりあえずだ。  
「最後の方が飛びすぎて話が解らないんですが・・・少女の願い事の

こととか。」

「ごめん、僕に話せるのはこれが精一杯なんだ。その本人が語ろうとしない限り、ね。」

「本人・・・さっきの話の青年はニット帽のことなんですか？」

「その通りだよ。」

「『人間をやめてしまった』と言うことの方は話せますか？」

訪ねると、狩俣さんの口が重そうになった。

「・・・使つてはいけない魔法を、使ってしまったんだ。限界量の魔力を一気に放出させて、身体はそれに耐え切れずに変質した。」

そしてさっき言っていた『成長を止めた』に繋がるのか？・・・理屈はよくわからないがこの人がそう言うのだからそうらしい。そして、大きな謎が一つ。

「・・・そのことを知っている狩俣さんは何者なんですか？」

「彼の旧友さ。ここ30年ほどは会つてもいないけどね。」

ニット帽と元友人関係だつて・・・？いやそれよりも・・・！

今何気なく言われた一言がおれの頭にひっかかってしまった。

「30・・・年？あの、狩俣さんはおいくつなんですか？」

「27だよ。」

おいおいおい、何なんだこのどうしようもない違和感は。まさか・・・  
「禁じ手を侵した素質者は、青年だけじゃあなかったというだけさ。」

「狩俣さんは振り向いて目を薄く空けた笑顔で言う。」

「どうも。『月』の素質者、狩俣素観だ。」

頭が混乱し始めている。当たり前だ、こんな状況一般人がそうそう遭遇するものじゃない。何だよ『月』って。そういう事は説明してから言えよ。さっぱり意味が解らない。もっと易しい言葉でだな。

「僕がいた世界では、魔法は大きく・・・日本じゃあ風水でよく使われている火水木金土、そして日と月の7つの属性に分けられていた。まあ、一般的に広まっている属性はそこからさらに分類されるんだけどね。そして素質者はその数、7人いたんだ。それぞれが得意と

する魔法がしつかり別れていて、それぞれが大分類の名前を冠した素質者と呼ばれるようになったんだ。」

「それで、狩俣さんが得意な属性は『月』ってわけですか？なんていうか、火水木金土日ではなくイメージつくんですけど『月』って正直よく分からないです。」

それに狩俣さんの”魔法”はどうもおれの知る魔法とは違うみたいだ。説明してくれた時に『ファンタジーの話だ』と言っていたから多分そのような世界なのだろう。魔法もまた然り。

「月という名前で言えば確かにイメージし難いかもしれないな。闇とか影とか・・・その辺りの分類のほうが有名だしね。」

ああ、そのへんのことなのか。闇＝悪人というイメージがあるのは俺の偏見かゲーム会社の陰謀かは知らないが、少なくとも現時点でこの人は悪人には見えないから正しい知識ではないのだろう・・・でも、そういうものに出てくる悪人って後半で本性剥いたりするんだよな。ああこの考えもよそう、さすがに失礼だ。

「えーと・・・ニット帽とは仲良かったんですか？」

「良くなければ一緒になってこんな身体にはならないさ・・・いや、これはあいつに失礼だな。僕はまがりなりにも人間を留めているというのに。」

「え？」

「あいつはね、身体の変質が酷くてそのものを変えてしまったんだ。今している外見はおそらく魔法を使って姿を変えているにすぎないよ・・・僕は術者本人ではなくてサポートだったから今の状態ぐらいで済んだんだよ。」

今の状態というのは成長の停止・・・か。

「昔はどんな奴だったんです？」

「今と全く変わらない。」

なんか、これまでにないほど強い口調で言うもんだからおれの中のシリラスな雰囲気ぶち壊しですよ狩俣さん。

「でも、考えなしに動くような奴じゃないさ。君をこちらに飛ばし

たのも何か理由があったんだろうね。」

「そう……ですか。」

「あいつの言うとおり普通に日常生活を送っていればいいと思うけど、君からしたらそれも落ち着かないだろう?」

当たり前だ。慣れない世界に放りこまれてリラックスしていられるほど凶太い精神は持っていない。

「そこで、僕から提案があるんだ。」

「提案？」

「ああ。僕から特訓を受けてみないか？」

特訓？・・・この人から受けることと聞いたなら、もしかして魔力の循環のことか？というか今はそれしか浮かばない。

「魔力循環のですか？」

「え？ああ・・・それもあるけどね。やっぱりこっちに集中したほうがいいか・・・よし、魔力循環だけにしようか。」

違うのか。しかもあっさりおれの発言を受けて変えるほどどうでもいいことなのか。

「・・・何のつもりで言ったんですか。」

「はは・・・マジックだよ。」

この人のキャラがわかってきた気がする。

「あー、そちらは遠慮します。西城が習いたがってたんであいつにでも伝授してやって下さい。」

「詩織ちゃんか・・・結構働いて貰ってるしそれもそろそろいいかもしれないなあ。おっと、本題からズレ始めたね。どうだろう？やってみるかいい？」

確かに、魔力循環ができるなら仮に今後魔力を補充するチャンスがあればそれ以降はこちらの世界でも魔法が使えるようになるだろうが・・・そもそも肝心の魔力がない。特訓なんてできるのだろうか。

「特訓っていいですけど、具体的にはどういうことをするんですか？」

「そうだなあ、まずは基礎を作らないといけないかな・・・。君も知っている通り、長時間魔力を留めておくことはとても難しいことだ。」

「ん・・・まあ持久力には自信ありますけど。先生よりもあるって言われましたし。」

ここで言う先生は普通に学校の教師のことだ。もちろんおれの世界の、だが。

「それは素質のおかげだろうね。他の人よりも魔力の保持に優れているんだ。」

「そうなんですか？おれよりも上の奴、何人もいましたけど・・・」

「さつきも言ったろう、素質者そのものはそう珍しいものじゃないさ。」

「あ・・・そうか。」

最初に聞いた話ではだいたい100人に1人の割合だったか？・・・あれ、待てよ。狩侯さんの世界では確か凄く限られていなかったか？

「狩侯さんのいた世界では7人でしたよね。おれのほうではごろごろしているんですけど、どうしてそっちはそんなに少ないんですか？」

「要因といった要因はわからないけど世界によつては大きく異なっていたりするところがあるんだよ。ただ、そういうケースは稀だから基本的に100前後と考えてくれてかまわない。」

なんだかしくりとこない説明だったが、狩侯さんがこう言う以上おれは鵜呑みにするしかない。自分一人ではこんなことすら知れもしないわけだしな。

「とにかく、魔力を放出する時にそのまま自分の体に戻すという行為はこれから半永久的に留めておくのと同じだ。とくに魔法を使わない間もずっとね。」

そういわれてみると確かにそうだ。1、2時間留めるだけでも辛いのに何日も、何ヶ月もなんて本当にできるのか。

「不安そうな顔をしてるけど、それが最初の特訓だよ。長い間の保持を可能にする為に身体の方を『魔力が常に溜まっているのが自然な状態』に慣らすんだ。」

さも当たり前のようにあっさりと言い放つ狩侯さんだが、慣らすも何もおれはそんな長時間やってられないのだからどうしろという話だ。

「どうやって慣らすんですか？」

「少々無理矢理に。」

物騒なことを言っただけの引き出しからなにかブレスレット・・と言っただけは、バンドのようなものを持ってきた。ほら、と言われても何も知らないのだから反応のしようがない。

「これは魔力の流れを止めて付けている間魔法を使えなくする。つまり、魔力を吸収してからこれをつければ嫌でも魔力が逃げないってことさ。」

「えー、これまたあっさりと言った狩侯さんのかわりに今のこのことの大変さをおれから解説しよう。口と鼻を無理矢理塞がれて長時間息を止めるといふのと同じことだ。ましてや何分ではなく何十日何ヶ月である。おれに死ねと言っただけのお方は。」

「どれだけ荒療治なんですか！」

「はははは、息止めるって言ってるんじゃないから大丈夫だよ。」

「同じことですよ！確かに身体は大丈夫でしょうけど精神的に保たないんじゃないですか!？」

身体は魔力を必要としているわけではないしとくにあつて困るものでもない。だから理論上、身体の方は多少の違和感をもつだけで深刻な状態にはならないが、今回は精神の問題だ。時間に比例してかなりの精神力を浪費する魔力の保持を強制的にやらされるのだから一般人が無茶をすれば廃人になりかねない・・と教わった。精神に過度なストレスがかかれば必然として身体の方にも異常が起こるだろう。だが狩侯さんは言った。

「耐える」

あー何が。『だ何が耐えろだ某ケーキ屋のマスコット顔になるな。そもそもなんでこんなことやらなきゃならんてゆーか肝心の魔力はどーすんだ。』

「・・・ニット帽が動くまでの暇潰しに命擦り減らしたくないんですけど。それに肝心の魔力はどこにあるんですか。」

「絶対に必要になる日がくるよ。これは断言できる。」

「どうしてそんなことが・・・」

「ま、大丈夫さ。素質者なら聞く話よりもぜんぜん楽なもんだよ。」  
大事そうなことを断言できると言っただけと思えば次の発言では人差し指を立て笑顔で話しを反らす。真面目なのか不真面目なのかはつきりしてくれ・・・。

「魔力のほうは僕の魔力を少し受け渡せばいい。伊達にニット帽子と同じだけ素質者やってないさ。」

なるほどな、魔力についてはそういうことか。・・・これはまったく関係ないが、狩俣さんとはかくニット帽は素質者ではなく変質者の間違いではないだろうかと考えた自分がいた。

「まずは軽く行こう。手を出してくれるかな。」

言われて、おれは狩俣さんの差し出した手を握る。すると狩俣さんが詠唱を始めた。

「伝えよ彼の物へ、力を。」

実際問題魔法を使う時に詠唱をする必要は全くないのだが、基本的に魔力は”種類”なので微妙なさじ加減で魔法の内容が変わってしまう。そこで言葉をキーに覚えれば幾分か覚えやすくなるというだけなので、詠唱の内容は人それぞれ思い思いの言葉だ。おれは詠唱をやるほど多くの魔法を普段から使うわけではないのであまりそういうことはしないのだが、それだから実技試験で困るわけだ。

「よし、いくよ。流し込みが止まったら魔力封じをつけてくれ。」

頷くと少し懐かしい感覚がした。4日、か・・・1週間も経ってないのに案外長いもんなんだな。

「最初はこんな所でいいかな。もう着けていいよ。」

少し懐かしがっているうちに終わったらしい。魔力の量は多くなく、むしろ少なかつたぐらいで基礎に近い魔法で使う程度のものだった。とりあえず言われた通りにバンドをつけると・・・どうにも不思議な感覚だ。集中を解いても魔力は外に逃げることはない。聞いた通り、思っていたよりもずっと楽な内容だったが、少しの気持ち悪さもあつた。まあ、吐き出そうとしているものを無理矢理押さえられている

のだから違和感があってもおかしくはないのだが。

「最初だから魔力は少なくしておいたよ。これで一日過ごして貰って、あしたまた魔力を増やす。その繰り返しだね。」

「徐々に慣れさせていくってわけですね。」

やることはわかったんだが・・・ここで根本にもどらせてもらおうとあれだ。

「留めて生活するだけじゃあ何の気晴らしにもならないんですけど、他に何かまだ特訓があるんですか・・・？」

「感のいい相手は話が進みやすくていいね。」

狩侯さん苦笑・・・あー、どうもあるみたいだ。話は最後まで聞くよう心掛けようおれ。

「持久力を身につけさせることのほうはできるようになった後のための準備運動だからね。身体環境ができていても使い方を知らなければ話にならない。」

狩侯さんは続ける。

「そうだな・・・口の中に一度空気をためておいて、押し出すみたいに吐きながら鼻で吸うのと同じ感じかな。それを手と魔力で行えばいい。練習のときは魔力封じを外してくれて構わないよ。」

そんな器用なことやったことがない。感覚的にはわからなくもないんだが・・・。

「えーと・・・失敗して魔力を使い切ってしまったら？それに、魔力を出してしまつたら溜め込んでおく意味がないんじゃない？」

「出してもすぐに戻すんだから問題ないよ。あと、カラにしてきたら明日の補充で少しづつと言わずに魔力1倍増。あんまり失敗しないようにね。」

まじかよ・・・！それにしても、だんだん本性見せてきたな、この人。二ツト帽の旧友ということの間違いがなさそうだ。

「まあ練習だけならごく少量でいいんだから、そんなに使わないよ。実際に魔法を使うわけじゃないからね。」

「はあ・・・。」

「落ち着いていられないときは今言った練習をするといい。そのうちニット帽子も仕掛けてくるさ。」

狩俣さんが席を立ったのでおれも立つ。そのまま連れられて店に戻・  
ろつとするとだ。

「よ、魔法使い。」

西城が廊下に居た。こいつはまたわけのわからないことをほざいて  
いる・・と流したい所だったがこれはひよつとするとまずいんだろ  
うか。いやまずい。非常にまずい状況みたいだ。

「・・聞いてた？」

「ばつちり。」

間。『何を？』と聞き返されないうちあたり確実にコイツは今していた  
話に聞き耳を立てていたのだろう。

「あはは・・詩織ちゃん、どのあたりから聞いてたのかな。」

「んー、ぶんたがなんちゃら代理人？つて言ったあたりですかねー。」

まさに今日の内容全部じゃねえか。

「まったくー、ぶんたが魔法使いとはびっくりだ。」

狩俣さんに目をやると、肩を竦めて観念したように首を振った。あ  
あもうどうにでもなれ。

「・・西城は疑わないのかよ。あんな会話きかされたら引くだろ、  
普通？」

「なんでよー。別に友達一人なんか使えたところで引かないよ。あんなマジムードで話してちゃただの痛い話にも聞こえないし。」

・・ああ、そうか。西城は多分昨日の話を聞いていないから異世界  
どうたらについては知らないのか。それなら少しはましなのかもしれ  
ない。今日の会話でも何度か『おれの世界』という単語が出たが  
普通に考えれば異世界なんてぶつ飛んだものじゃなく価値観の区切  
りとかで使う単語じゃないか。それならおれの世界 今の場合は言  
葉のまま異世界のことだ。でも魔法が使えない人間の話は聞いたこ  
とがある。そう考えると別段非常識なことでもないんじゃないか・

？でもなんだかまだ引つ掛かりがある。

「むしろ尊敬！って感じかな？いやあー、身近に天才がいたもんだ、それも二人っ。絶対世界のどっかにいるとは思ってたんだよねー。」

「詩織ちゃんはある意味で天才以上だな・・・」

「え？」

（魔法がどうこう、なんてこつちでは非常識すぎるんだよ。）

今の耳打ちでさっき考えた仮説はさっそく打ち砕かれ、西城の妄想癖がこちらでも健在であることがはつきりした。ははは・・・今ばかりはこいつの頭に感謝せざるをえない。

「未知の可能性を追い求めてこそ人間ですよっ。」

だがやはりこいつの発言は意味がわからん。

おれは西城の色々な質問をかわしながら表の店へ戻って来て、狩俣さんは料理の下ごしらえしてくると台所に残った。そういえば少し腹が減ったな・・・昼食べてないんだっ。よし、少し売り上げに貢献していこう。

「西城、注文取ってくれ。」

「お、食べてくの？ちよつと待つてなーメニュー持ってくるから。」  
そう言われて近くのテーブルを見てみるとたしかにメニューらしいものがない。・・・えーと、もしかしてカウンター注文ってやつ？喫茶店らしい喫茶店に入ったことなんてここが初めてだからいまいちわからない。西城が戻ってきたので聞いてみることにする。

「もしかして、おれ何か間違ってた・・・？」

「いや、合ってるよ。テーブルメイクされてないだけ。」

おい。いいのかそれで。

「こんな時間に誰もこねーってさー。私みたいな美女がいるというのに。」

「つつこまないでおいてやるからボケるときにだけ第一人称を変えるな。」

「えー！？私普段そんなに私って使わない!？」

「ああ、使わない。」

軽く受け流しながら、持つて来てもらったメニューを見る。・・・なんか、喫茶店というより料亭というか。いや喫茶店らしい定番の洋食もあるんだが家庭料理がメニューの8割を占めているのは何なんだろうか。芋けんちゃん、かぼちゃ、おからご飯セット・・・？

「近所の若い奥さんとか中高年のおばちゃんに人気なんだよ、店長の料理。」

「・・・みたいだな。じゃあおれサンドイッチ。」

注文を受けると西城はメモをとりながら折角なんだから和食食ってけよと口を尖らせるが、一食入るほど腹が減っているわけでもないからそちらはまたの機会にしよう・・・。

「さっきの話なんだけどさ。」

やってきた軽食を食べながら西城に話し掛ける。

「絶対誰にも言わないでおいでくれな。」

「ん、何かバレるとまずいことでもあるわけ？」

「おう。」

頷くと西城はにやにやしながらそうかそうかーと天井を見上げ始めた。・・・これは真面目に言われたら困ることだって釘を刺す必要があるな。

「お前を信用してなきゃ最初からこんなこと頼まないんだぞ？お前が真剣事は絶対に守るやつだって知ってるしな。」

そこまで聞くと西城は一瞬呆気に取られたような表情で固まって、それから微笑んだ。

「おっけ、そんなに大事な事なんなら言わないよ。」

「ああ、さんきゅ。」

「鋼治と忠には？」

「忠はもう知ってる。吉崎には言わないでおいでくれ。」

今わざわざ『口外しない』の確認後に吉崎と忠のことについて問われた事が意味しているのは二人が俺と西城の中で特別であることに

外ならない。だから今の質問につっこみを入れることもなく、普通に答えだけを返した。

「なるほど、そんなにでかいことなんだ。」

正直、西城にはすまないと思う。仲間内での隠し事を頼み込んでい  
るわけなんだからそれほどいい気分はしないだろう。その上知らない  
のは吉崎だけだ。4人中の2人に隠すのではなく4人中の1人に  
隠すとなれば余計に酷い。一人だけを仲間外れにしているというの  
はさぞ気分が悪いだろう。

「・・・悪いな。」

考えていたら、無意識のうちに呟いていた。

「なんで謝るんだよ。元は俺が盗み聞きしたのが悪いんですよ。」  
どーせ忠も、と悪態をつき加える。普段散々に言われているささや  
かな仕返しなんだろうか・・・そういうのは本人の前でやってはじめ  
て意味をもつんだぞ、忠みたいに。

「・・・まあ、忠のときは忠が悪いとは言えなかったけどな。」

「お、何があつたんだっ。」

「ニット帽のやつが絡んで。」

はっ。危ない・・・まずいとこまで言いそうだった。

「あー、なんか二人の話にでてきてた人？」

「ん・・・ああ。」

「ちょっと教えてくれない？お客さん来てないか見に行つてたから  
その人の話聞いてないんだわ。」

ああ、謎が解けた・・・これは不幸中の幸いだった。

さすがの西城も狩俣さんの正体とか人間をやめたニット帽の話とか  
を聞いていたら常識的にアウトだったに違いない。なんでこうも平  
然と疑わずにいられるのかと引つ掛かっていたが、肝心な部分を聞  
いてなかったのならこれ以上簡単な話もないな。それならニット帽  
のことは

「魔法使いだ。それも味方じゃない。」

こう答えるのが一番無難なところか。奴だって西城から見れば

『魔法使い』だろうし、少なくとも味方ではない。嘘は言っていないはずだ。

「味方じゃない・・って、お前ら何を争ってるわけ？」

あー・・失敗した、今の答えじゃたしかにその疑問に辿り着くわな。「さあ。あいつが一方的に突っ掛かってくるんだ。」

しかしまあ、不満な顔をされてもどちらにせよおれにはこうとしか言いようがない・・ごまかす以前に実際のところこうなのだから仕方がないわけで。

ここまで話したところで入口からカランと来客のベルが鳴った。

「を、お客さんだ。ちょっと食っててよ。」

西城がいらっしやいませと声を出しながらメニューを取りに行ったので、お言葉に甘えてサンドイッチの残りを食べることにした。

わざわざ金を払って食べるものかなと思いついていたんだが、煮力ポチャのサンドイッチがなかなか美味い。量が少ないわけでもなく、料理なんてできないおれにはこれをワンコインで食べれるのなら安いほうだと感じた。・・まあ、わざわざパンに挟む必要は無いと思う。

「隣、失礼するぜ。」

さっきの客だろうか。向かいの椅子に誰かが座った。・・こんなにがらがらなのになんかわざわざ物好きな客だな。

「はい、どう」

ぞ、と言う前にそろそろ見覚えを覚える顔が視界に入った。

「　　いうことだ、何の用だよ。」

「んー、べっつにー？今日も別にどうこうするつもりはねーからそう構えるなよー。」

言うまでもないだろう。噂をすればなんとやら、ニット帽だ。

「だったら出てくるな。おれの話もきこうとしない癖に。」

なんとまあタイミングの悪いことだ・・いや、こいつの事だから狙

ったのかもしれない。いつもなら問い質しはじめている所なんだが

「あれ、知り合いだったんですか？」

西城がメニユーを持ってひよっこりと現れる。そう、西城に聞かれてはまずい話にまで発展しそうでこいつを問い詰めようにも問い詰められないわけだ。

「おー？店員さんはぶんちゃんの友達つてやつー？」

仮にも初対面の他人になんて無礼なやつだ。

「友達以上恋人未満ですね。」

仮にも初対面の他人になんて馬鹿なやつだ・・・。

「ひゆうー、やるじゃん。」

「・・・西城、お前は間違つても恋愛対象になりえないぞ。」

棒目でひでえー、と文句をたらす西城を横目にニット帽と向き合い、言葉を探してみる。なにか怪しまれず自然に情報を聞き出せないものか・・・だがこいつはおれの視線もおかまいなく、楽しそうに西城と喋っていた。

「へえー、詩織ちゃんつて言うのか。」

「お客さんはぶんたとはどついう仲なんですか？」

「・・・こいつがニット帽だよ、さっきの話の。」

余計なことを言われないうちにさっさと話を終わらせたほうが賢いだろう。西城に遠回しに話さないほうが特だと伝えた・・・つもりだった。

「え・・・。つてことは、魔法使いなんですか？」

やっちゃまった。

自分の失敗を振り返り、おれは頭を抱える。今は黙っておけばよかった所だった。

「へえー、詩織ちゃんは魔法があることを知ってるのか。」

「知ったばかりですけどねー。ですけど絶対どこかにいると思って

ました！」

知ったばかりねえ、と横目でおれを見るニット帽。おれも好きで教えたわけじゃねえよ。

「あの、お客さん。」

「ぶんちゃんの友達なんだろう？また会うだろうからニットでいいぜ。」

おれに付き纏うなら勝手に残して行った謎を解いてからにしてくれ。

「俺にも魔法って使えたりしませんか？」

「ぶつ。」

思わず口に少し残っていた水を吹いてしまった。な、何を言い出すんだこいつは。

「おー、できるさ。」

当たり前だろ、そんなことできるてたまるか・・・よ？

「ちよつと待て、どういうこ・・・」

「本当ですかっ!？」

あー、西城はもう完全にスイッチフル稼働状態になってしまったみたいだ。目を輝かせて、尻尾があればこれでもかと言うぐらいに振ってそうな・・・いや落ち着け、それよりも今ニット帽が言ったことは・・・

「魔法が使えないやつなんてそうそういねーさ、使い方を知らないだけなんだぜ？」

「ど、どうすればいいんですか？」

「今はまだ教えてやれないけど、時間ができたら話を聞かせてやるよ。ぶんちゃんもそれでいいな？」

また謎を増やしていくわけか、こいつは。ていうかニット帽、今話せないとか抜かすなら西城に妙なことを吹き込んでいかないでくれ・・・こいつは話を終えたと判断したんだろうか、よっこらせと立ち上がるところ聞く。

「詩織ちゃん、今マリカはいるか？」

「え、マリカ?・・・あー、店長のマジックですか。あれ昼までなん

ですよー。」

「あ、悪い悪い。そつちの名前しか覚えてなかったんだわ、店にいるかどうかを聞いたかったんだ。」

「あ、そうでしたか。あはは、たしかに覚えやすいですもんね。M「マリカのほうか。」ちよっと待ってて下さい、と店の奥へ消えてゆく西城。受け答えから察するにマリカとは狩侯さんがマジックシヨーのときに使う芸名みたいなものなんだろうか・・そしておそらく、ニット帽がつい口に出したことからして

「ひゅー、あぶねあぶね。あいつがこつちのほうの名前も名乗っててくれて助かったわ。」

本名。たしかに狩侯さんは異世界の人だと言っていたし、横文字の名前じゃあこちらではなにかと不便だろう。異様に似合う純白の髪は染めているわけではなく、狩侯さんが『そういう世界』の住人で生まれ持ったものだからにほかならなかった。・・戸籍とか、どうなってるんだろうなあ。

「さっきの話だけどよ、ぶんちゃんも見てただろ？」

ニット帽が不意に話し掛けてくる。軽く考え事をしていた不意をつかれたのもあるが、何よりニット帽のほうから真面目そうな話しを切り出して来たのが意外で一瞬固まってしまった。

「・・何を？」

「『こつち』のやつにも魔法が使えるかって話だよ。眼鏡の奴が無意識に結界張ってたの、忘れたか？」

それは吉崎のことだった。・・半分どこかに行っていたが、あいつはたしかにあそこで魔法を使ったんだった。この世界には魔力がない。だが、ただそれだけのことで、それさえあれば誰にでも魔法が使えるということなのだろうか？

「さすがにぶんちゃんもこんな簡単な問題、間違った予想は立てないだろ？」

「・・何か企んでるんじゃないのか？わざわざ西城を離席させておれに物事を教えるなんて。」

コイツが親切心を働かせるとは、そりゃあ疑いたくもなつてくるもんだ。もつとも、こいつが行動を起こすならおれ自身のことにも繋がるわけだからそれはそれで都合がいいのだが・

「この程度のこと、教えたことにならねえよ。ぶんちゃんも魔法世界の住人なら驚くことじゃないだろ？」

「いや、たしかにおれにとって万人が魔法を使えるのは普通のことなんだが、こちらの世界に関しての謎なら別であるし、数も尽きない。それを奴はあっさりとおれの謎がどんなにちっぽけかを言い放つたのだった。

「来たな。」

狩侯さんを連れて西城が戻ってきた。・・そうか、狩侯さんにとってはかなりの時間をおいた再会になるんだな。狩侯さんは、ここ2日でおれに見せたことのない”緊張”を見せていた。

「久しぶりだな？・・あー、ニット。」

「おー、嬉しいね、覚えててくれたのか。でも名前は忘れちゃったか？」

「そういうわけじゃないさ。」

言葉ではさつきまでおれと話していた時の涼しい口調だったが、微妙に苦笑いを浮かべる狩侯さんの顔には動揺が見て取れた。

狩侯さんにも、ニット帽の訪問は想定外だったのだろう。そして、一見するにそれは『親しい友人と再会した』という喜々とした雰囲気には見えなかった。

少し二人で話したいと狩侯さんとニット帽は店の奥へと消え、店内にはまたおれと西城が残った。

「なあぶんた、ニットさんと店長ってどんな関係なの？」

当然のごとく尋ねられるが、俺の知るところに詳しいことはないわけ。これは誰にでもよくあることだと思っただが、人間誰かに少しでも話を教わるとき、相手はその物事を完全に把握しているものと無意識に勘違いする。最初に『よくわからないのだけど』と付け加えても同じことで、相手は自分の知らない答えを知っていると

考えてしまう。仕方のないことなのだが、質問される側にとっては正直に知らないと言いつけるか適当にはぐらかすしかないのである。「俺もよくはわかってないけど、若い頃の友達だつてよ。」

・だが、西城の質問に対する答えはこの程度で問題なかったのかもしれない。二人はどういう関係かを聞いて、いきなり深いところを知ろうなんて思う人間がどこにいるものか。

「へえ、若い頃か……。店長、今であの若さなんだから昔は童顔ちびっこだつたのかな。」

「あほか。成長がまるまるズレてるわけじゃないだろ。」  
今ので少し和んだ。

まったく、おれは心配性なのかね。少なくとも、西城と忠にはあまり気を遣わないでよさそうだ。

話にはまだ時間がかかりそうだから今日は帰ってくれと狩俣さんに言われ、おれは帰ることになった。このまま臨時休業にしてしまうらしく、西城もついてくる。

「店を閉めるほど嬉しかったんだね、すみさん。」

「は？」

駅への道をてこてこ後に続いてくる西城の言った言葉に酷い矛盾を感じて思わず声が漏れた。

「難しい表情してたぞ？嬉しそうには見えなかったけどな。」

「付き合いが長いとわかるんだよね。」

こう言った後、言葉不足だと思つたのか付け足して

「ほんの少し、だけどね。」

このほんの少しが『ほんの少し付き合いが長いと』なのか『ほんの少しわかる』なのかは読み取れなかったが、そんなもんなのか、と素直に受け取ることにしておいた。

家に帰ってきた俺は早速”特訓”をすることにしてみた。しかし改めて意識してみると、この魔力があることの安心感。身体に残し続けるという違和感のあることをやっているはずなのにリラックスできたのはやはり今日まで魔力を感じることもすらもできなかったためなのか。まさにないよりマシってやつだ。そしてこうして感じてみると、この魔力を無駄にしないようにとより特訓に集中できそうに思う。

さあ特訓初日だ、頑張ってみるか。

「どうした？まだ時期でもないだろう？」

「ま、ちよいと気になってな。なんせ初のケースだ。」

「何が気になってな、だ。お前がやったくせに。」

いつでもどこまでも白々しいこいつを軽く鼻で笑う。懐かしい、けど慣れたやりとりだった。

「コーヒーでも飲むか？」

「物が食えるよーな身体じゃねえよ、よくわかってんだろーが。」

「理解ってるから言うんだよ。」

性格悪くなりやがって、と悪態をつかれるがコイツの顔は笑っていた。これもいつものことだ。

「煮力ボチャひとつ。」

「物が食えないんじゃないのか？」

「いいんだよ、お前のあれは美味いから。」

どういう理屈だ。そう思う反面、料理を褒められるのは素直に嬉しい。誕生と保護の「土」を持つこいつのことだ、味わうだけ味わって身体のほうはどうかするぐらいのことはできるんだろう。

「ぶんちゃんの様子は？」

「これからってとこかな。以外とはやく循環の特訓に食いついてくれたから。」

これには僕も驚いている。

「得意な手品にでもさそって仲良くなってからとでも思ってたらしい子でな。あっちから魔法のことを切り出してきて、一か八か誘ってみたらわりとすぐに興味を持ってもらえたよ。」

「やっぱ記憶が残ってるってのは確かだったか？」

「ああ、話が楽しかった。気を遣う必要がなくてね・・最初からこうしてほしいとこだったよ。」

愚痴を漏らすと、こいつは『ククク』と気持ち悪く笑って言った。

「今回は俺も予想外だったんだよな。」

「なんだって？」

まったくこいつは本当に回りくどい。聞き返した僕への返答がこれだ。

「神様の気まぐれってところかね？」

にやりと、口を歪ませて。

「本内ー、本内ー。」

講堂に梶野さんの声が響く。よしよし、たまにはこうでねーとバランスがなつてねえってヤツだ。

自分で言うのもなんだが、俺が起きてるのは珍しい。だがそれ以上にこいつが寝てるのも珍しい、昨日夜更かしでもしてたのかね。・うーん、面白い深夜番組とかやってたかな？

「本内が居眠りなんて珍しいな。・おい吉崎、お前何かしらないか？」

「知らないっす。俺が聞きたいぐらいすよ。」

・・ありや、待てよ？

「ねえ梶野さん、なんでわざわざ居眠りしてる奴起こそうとしてたわけ？」

俺達の担任でもある化学の講師、梶野さんは結構親しみやすくてフランクな先生だけど居眠りしてる奴は無視してその授業の単位をやらさないタイプだったはず。というか普段の俺がその扱いなんだが。

「お前ならともかく、本内に単位やらんのはかわいそうだろ。」  
クスクスと笑い声が聞こえる。あれー、どういう意味よこれー。

・・ええい気を取り直せ吉崎鋼治！なにはともあれ本当に珍しい状況だ。昨日何をしてたのか気になるところなんだけど。・うん、とりあえず文ーを起こすことにした。起こさないと質問もできないし何より梶野さんの起こせオーラが怖い。

「起きろねぼすけ！」

「げふおっ!？」

OK、今日の俺絶好調。今なら鮫田ダイキも倒せるね。まもなく梶野さんから称賛の言葉がくるはず。・

「普通に起こせんのかあアツ！」

「はぐあ!!--」

つ、強い、強すぎる・・・奴は斉藤か・・・っ！俺、一発K・・・。  
俺の倒れた音と同時に梶野さんは告げた。  
「はい、吉崎早退つと。よかつたなー本内。」  
「いーんすか、それ」

## 五日目

さて昼食時。いつもの4人で学食だ。  
「で、どうしたんだよ？お前が居眠りなんてめずらしいなあおい。」  
「寝不足なんだよ・・・」  
本当の理由を話せないのは結構ストレスのたまるもんだ・・・それも眠いからなあおさら。さあどうやってごまかそう？ここは・・・まあ、別にいいか。どうにかなるだろ。  
「ごめんなーぶんた、遅くまでメールに付き合わせてさー。」  
横から西城が声を割ってきた。顔を見るとおれにむかってウィンクを飛ばしている。  
西城、ナイスフォーロー！でもウィンクは気持ち悪いぞ、気付け。  
「んだよ、そういうことか・・・ちー、心配して損した。」  
「何を心配してたんだ？」  
「今週の俺の財布。」  
「やっぱりか。」  
「なあ本内、お前携帯持ってたか？」  
こんどは忠が話しを入れてくる。馬鹿、空気を読め空気を・・・！  
「あ、おう・・・昨日買ったんだよ、西城に手伝って貰ってたさ。」  
「なんだと、ただちに俺にメルアドをよこすべきだ。」  
吉崎には悪いがおれは携帯なんて持っていない。というか、テレパシーがあるだろテレパシーが。必要性を感じな・・・ああ、こっちはないんだったな。うん、検討してみてもいいかもしれない。

「残念ながら携帯は家だ、それにアドレスなんてまだ覚えてもない。」

「まったく携帯の意味がないな。」

「ここまで言ってしまったら真面目に探したほうがいいかもしれない。」

「じゃー西城、文一の教える。昨日メールしてたんなら知ってる？」

「え？」

切り返しを予測していなかったのか西城は間抜けな声をあげる。実際虚を突かれたのだろう。いや、え？じゃなくてだな・考えてから言えー、と言いたいところだが助けてもらっている以上大口は叩けない。

「それは無駄だな、吉崎。」

「こんどは忠が口を挟んでくる。」

「なんで忠が無駄だなんて言うかねー。申セツ。」

「こいつ、午前中ずっと携帯弄ってたからな。いいかげん電池も切れてるだろ。」

「・・・おっけ、俺の教えるから帰ったらメールくれ。」

忠にはまだ特訓のことを話していないから、察してくれたのか本当にそうなのかはわからないが助かった。こうしてとりあえずこの場は切り抜けられたわけだが、同時に携帯購入という宿題を持ち帰ってしまった。

さて、今日も午後授業の終わりを報せるベルが鳴る。

「よっしゃ、ゲーセンいこうぜゲーセン！」

このままならいつものように4人で遊びに行く流れだが・・・おれは携帯を探しに行かないとならない。しかしおれには経験がないことだ、選び方も何も検討がつかないので、誰かの助けが必要になる。

・・・忠に頼むかな。ついでに特訓を始めたことについての報告もで

きるし、男二人のほうが気楽だ。よし、結論が出たところで行動しよう。

「悪い、今日はパス。忠、ちょっと付き合ってくれないか？」

「・・・」

忠はこくりと頷いてくれた。

「それで、どうしたんだ？また何かきになることでも・・・」

「あ、いや。そうじゃない。」

そついや忠を呼び出したのも初めてじゃないからな。前回は前回だ、そりゃあそつという勘違いもするだろう。

「？」

「携帯探しを手伝ってほしいんだ。」

忠の頭にハテナマークが増える。

「なんだ、お前は携帯を買って早々に無くしたのか？」

「いや、そうでもない。」

今のは言い方が悪かったみたいだ。・・・なるほど、さっきのは察してくれたんじゃないかと本当に西城はずつと携帯を弄ってたんだな。助かったが、情けないというか・・・

まあいい、忠ならおれの事情を知っていることだし、話しておこう。

「実はな、携帯なんて初めから持ってないんだ。」

「・・・というわけ。」

「まあ、話はわかった。」

話すことを話したら忠はなんかもう呆れ顔だ。・・・事情のほうは別段呆れられるようなものではないと思うが、今日のやりとりはもう少しごまかし方があったかもしれない。実際いま俺は携帯の購入を余儀なくされている。

「携帯ってどこに売ってる？」

「どこにでもある。」

「スゲーな、コンビニでも携帯が買える世界か。さすが魔法を補う部分が発達してる。」

「それは合ってると言ったら合ってるが、間違ってる。・・コンビニで携帯本体は買えないぞ。どこにでもあるとは言ったが揚げ足をとるな。」

「おい、合ってることは合ってるのかよ。携帯本体は買えないぞ、って本体以外は買えるのか。いや本体以外ってなんだそもそも。」

「そうだな・・普段携帯を使う用事も少ないだろうし、プリペイド式にしたらどうだ?」

「ぷり・・ぺいど?」

なんだ、それは。魔法がないかわりにこっちの世界にはなにか特別なものもあるんだろうか。」

プリペイド・・携帯に使われるということは通信手段にちがいない。しかも普段使うことの少ない人に対して有効ということは回数制限付きの高速伝達といったところか!テレパシーに似たようなことができるのか、それとも想像もつかない手段か!コンビニで買える本体以外のものとはこれの資源なりエネルギーなりに違いない・・!

隣を見ると忠が頭をかかえて絶句していた。

「どうした、気分でも悪いのか?」

「いや・・お前のあまりの空回り発想に感心したというかなんというか・・。」

「・・言ってた?おれ。」

おれの質問とともに忠は少し驚いた表情を見せ、また呆れ返ると、  
「・・数秒前に発言したかどうかも覚えてないのか。」

こう言った。考えてたことが声に出ていたようだ、丸々筒抜けだったとは・・。

「で、プリペイドってなんだ?」

「料金の支払い方法だ、馬鹿。」

・・・これは恥ずかしい。こうなるとおれは前提から間違っていた論を丸々全部垂れ流していたことになる。

「OK、聞かなかったことにしてくれ。」

「明日の話のタネは決まりだな。」

ああもう、発言には本気で気をつけよう。

いざ携帯売り場に来てみると、棚。棚。棚。ものすごい量の携帯電話が並んでいて、早速圧倒されてしまった。

「何呆けてんだ？」

「いや、電話とメールするだけの機械にここまで種類があるんだなあ。。。何の必要があるんだろ。」

「あー・・・言われてみれば必要はないよな。商業戦略ってやつだろ。」

もつともらしいことを言う忠。これが吉崎や西城なら

「何を言うか！携帯は機種選びがロマンだろ！」

だとか語りはじめて肝心の選ぶ時間を大幅に削りかねないから困る。

「まだバイトも見つけてないんだろ、使う額だけ入れておけたほうが無駄がないんじゃないか？」

忠がこう言うので言われるがままプリペイド式とやらを選ぶことになった。正直まったくわかっていない俺に選ぶ権利はないと言える。「残額分切れたら使えなくなるから忘れないうちにチャージしておくようにしろよ、少し多目にな。」

「おう、一日ありがとな。」

「連絡がとれないのは不便だろ。」

鼻で笑う忠にアドレスを貰って、今日はもう家に帰ることにした。

帰り道、ふと路地をのぞくと見覚えのある猫がいた。

「なんだよ、何か用か？」

この猫、たしかに縄張り争いに敗走して狩俣さんの店の近くまで追

い掛けたやつなんだが、今日は逃げるわけでもなく路地の先 要するに俺がいるところだ。 をじつと見つめている。

「そういえば、お前についていかなきゃ喫茶店に行くこともなかったんだよな。」

それに答えたわけじゃないんだが、なんとなくこいつにかまってみることにした。

「もしかして狩俣さんのペットかなんかだったりしてな、あの人なら魔法でお前に案内させるなんて楽なもんだろ。」

それを聞いているのか聞いていないのか、猫はあいかわらずこちらを眺め続けている。

しかし猫に反応を期待したおれが馬鹿だったんだろうか。 コイツ、眉一つ動かさないぞ。

「じろじろみやがって・何かあるんならせめて鳴き声の一つでもあげろつての。」

何の期待もせずに皮肉を意識した文句を投げ掛けると猫は「にゃあ」

と返事をしてとたととこつちに歩いてくるではないか。

「通・・・じた？」

うん、正直戸惑っている。誰が野良猫が人の問い掛けに返事をよこすと思・・・

「お待たせ！ミルク持ってきたよ！」

・・・うんだろーなー。すたすたとおれの横を通り抜ける猫。こいつの見る先、おれじゃなかったじゃねえのあははは。ばーかばーか。無常にもおれを通り過ぎて行った猫は後ろからきた声のほうに歩いてゆく。

「あれ、本内くん？」

名前を呼ばれたので振り返ると、HRでよく見る奴がいた。クラスメイト

「羽原・・・だっけ、何やってんだよこんなところで。」

「それ、こつちの質問なんだけど。なんでゴミ捨て場の前にいるの？」

そんなことを言われても猫に話し掛けていただけなんだから返答に困る。仮にも大の男が猫に話し掛けていたなんて普通情けなくて言えやしない。

「あ、この子と話してたのかな？」

・言えやしないんだが、当てられたならそれはノーカンだよな。嘘をつくのも虚しいし、かといってそれと正直に言う以外にどうしようもない。うん。

「そういうこと。笑うなら笑え。」

「あつはははは！おかしいおかしい！」

「あのな、たしかにそうは言ったけど普通笑うか？ここで。・・・で、お前は何しにきたんだよ、こんなところに。」

「笑うなら笑っていいよ。」

どうも目的は同じだったらしい。

羽原とは普段話したりもなければ行事で偶然組んだりもなかったし、ただ見覚えはあるからクラスメイトなんだよなという認識ぐらいであまり接点がない。正直名前もうる覚えだったぐらいだ、下の名前なんて完全に覚えてない。

逆にむこうはこちらのことをある程度知っているみたいだった。それは主に吉崎の悪評のおかげで、どうも大学内で俺達4人組はなかなか有名な人らしい。かなりの人数から一方的に知られているというのものすごく複雑な気分である。

「ヤキソバパン事件とか、あれってなんだったの？吉崎くんの。」

「ものすごい事件名だな。そうくるとさすがにひとつしか浮かばないけど・・・。」

ヤキソバパン事件（と呼ばれているらしい）とは、いたって単純。

吉崎が食堂の中心で愛を叫ぶ、もとい

「ヤキソバパアアアンツツ！」と叫んだアレだろう。当然食堂内は静寂のち大爆笑。俺にも唐突すぎてわけがわからなかった。

「本人が言うには『ヤキソバパンが！ヤキソバパンが死にそうだった

「たんだ！」ってことらしいぜ。」

「あはは、なにそれ。」

笑いながら返された。うん、普通なら俺でもこういうリアクションをとるだろう。

「あいつ寝てたんだよ。跳び起きてヤキソバパンなんて叫ぶから俺もさっぱりだった。」

「あー、夢だったんだ。」

「そういうこと。一度あいつの頭の中を覗いてみたい。」

唐突ではあるがこんな普通の話しながら猫と戯れる羽原を見てみると、和む。普段女の子と話さないわけではないのだが、積極的に絡んでいるわけでもないのでもこういう機会は貴重なのだ。

もちろん西城はノーカン。奴を『女の子』と表すなら、男女の定義が崩壊する。

「その猫は羽原のペットなのか？」

「んーん、野良猫。いつもここにいるから私よく来てるんだ。」

ここは野良猫に餌を与えるな、とあいつらが相手ならツッコんでいるところである。だが、正直それほど親しいわけでもない人間にばかりりツッコミを入れるのも面倒くさいので話を反らすことにした。

「お前、縄張り争いに負けたんじゃないのか。」

「やあ、とやる気のない返事を返す猫。」

「縄張り争い？」

「この前、コイツがここで他の猫と喧嘩してて逃げたんだよ。」

「多分それエサ争いだよ、たまに私来ないと食べ物でケンカするの。」

だめじゃない、と気の抜けた注意を促す羽原。

「だから野良猫に餌を与えちゃいけないんだよ・・・」

「だって、可哀相でしょ。喧嘩するほどおなかすいてるんだよ。」

それは羽原が餌を持ってきたからほどよい満腹感が癖になっただけだ。

「猫社会の経済も深刻なんだね。」

おれは羽原のキャラをよく知らないからこの発言がボケているのか天然なのかまったくわからない。今までの会話からいまいちつかめないあたりどう反応を返すべきなんだ、これ。

「・・・猫も必死なんだな。」

今回は、あたりさわりのないよう適当に流しておくことにした。

「さてと、そろそろ帰ろうかな。」

話の区切りがついたところで羽原が立ち上がったのでおれもつられて立ち上がる。

「じゃあね、また学校で。」

「おー、またな。」

彼女は本当に餌をやりに来ただけらしく、猫が餌を食べ終わったことを確認すると帰って行った。おれも特に用事があったて足を止めたわけではない、このまま家に帰ろう

「よう。」

と思っただらこれだ。

「またお前か。」

そいつはまた肩をすくめながら、

「ありゃ、今日は驚いてくれねーのな。」

と言う。振り向けば案の定、黒い服のニット帽が立っていた。

「五日も続けば流石に慣れる。」

「そーかそーか、残念。」

「で？今日はどんな問題を残してきたんだよ。」

「やっぱりぶんちゃんの話が早いな。」

こいつがニヤリと笑ったとき、ぞわりとした寒気がした。

「こんな問題。」

言うと同時に、俺の周囲のコンクリートから岩が突き出してきた囲まれる。

「・・・ッ！」

「ようやく驚いてくれたな。」

「悪趣味だな、ただ驚かせるために魔法か？」

虚勢を張っているが、内心はかなり怯えている。足も震えがとまらないし声だつて安定しない。

「おーおー、ぶんちゃんでもビビるなんてことがあるんだなあ。」

「当たり前だ、俺は一般人だぞ。こんな非常識極まりない魔法なんて知るもんか。」

「残念、俺一般人じゃねーもん。」

「ああ、そこだけは同意する。」

こいつはおれを身動きが取れない状況にしてどうするつもりなんだろうか。

「そう警戒すんな、どうもしねーよ。でも安心はさせないぜ？」

「どういうことだよ。」

心を読まれたことには突っ込まないで即答する。少なくともこいつは自由に魔法を使えるみたいだ、そこは驚くことじゃない。

「文字通り、どうもしない。俺はもう帰るからその檻からは地力で脱出しな。」

「おい・・・！なんて無茶苦茶言いやがる！」

「それ自体はコンクリの下にあつた石をかき集めてつなげただけのやつだけど魔力でくつつけられてるからな、並の腕力ぐらいじゃあ壊せないぜ。」

「粘着させてるだけとはいえ、一度出した魔力を残し続けるなんてね・・・。お前は化け物か。」

「・・・ああ、化け物って言われることには慣れてる。」

「え？」

何気なく言った一言にそいつらしからぬ真面目な声を返して、そいつは、消えた。

「・・・化け物、ね。」

世界の魔力なしに魔法を使える体質で生まれて来たとは、一体どう  
いう気持ちなんだろう。おれには想像もできないことを考えようと  
して。

「・・・とにかく、こいつをなんとかしないと！」  
現状に気付いたおれだった。

「ぜー・・・はー・・・」

殴る蹴るはもちろん、体当たりしたり石の隙間に持っていたプリン  
トをねじこんでみたりと色々試した結論。

「無理だわ。」  
壊せるわけがない。

物理攻撃で崩せないとなればあとは粘着させているものをどうにか  
しかないのだがさほど魔法の成績優秀でもない俺にそんなことがや  
すやすとできようもない、論理の授業なんてノートを取るのが限界  
で頭に入りすらしていない。

「『魔力は細かい細かい』人が自由に動かせる原子のようなもの』  
で、人は昔からその動かし方ひとつで様々な魔法を使って来た』  
ねえ・・・」

魔力の成り立ちなんてそんな基礎の基礎しか覚えちゃいないやつに  
どうして魔力でくつついた石の塊を切り離すなんて高等技術を使え  
ようか。魔力でくつついた・・・

「これだ！」  
魔力は人が自由に動かせる、要するに石に付着した魔力に触れてバ  
ラしてやればいいだけだ。

「動いて行動を起こしてる魔力をどうにかするのはキツイけど、止  
まってる魔力なら・・・」

普段やる『一度体に留めてそれを使う』なんて魔力行使は必要なく、  
石の槍はガラガラと崩れ落ちた。

「よしっ、この調子で他のも片付けよう！」

そしてふと考える。

「こんな方法を思い付けらるなら、もうすこし頑張れば魔力の成績も上がったのかな、惜しかったなあ・・・」

「・・・いやこれ、ぶんちゃんの世界じゃちょっと頭を働かせれば中学生にもできることなんだけどな。」

「ッ！」

正直恥ずかしかった。

「帰ったんじゃないのかよ、なんでいるんだ。」

「いやさあ・・・サクツと抜け出してくるだろ普通？次のトラップでも思つて待つてただけだけど拍子抜けしたわ。お前よくそれで普通の成績がとれてたな。」

「授業態度はよかつたんだ！」

「まあいいや、寄り道しないで帰れよ。」

「・・・何を考えてるんだよ、お前。」

「さあ、何だろうな。」

「攻撃してきたと思えばやけにあっさり逃がす。おまけに『気をつけて帰れよ』。怪しまないほうがどうかしてる。」

「どんなに怪しまれても俺はそうそう口が軽かないぜ。」

「軽口は吐きまくるつてのにな。」

言葉に言葉を返していると奴はこんなことを言ってきた。

「正直ぶんちゃん、今俺に聞くことなんてないだろ？答えられることなら答えてやるから質問があつたら言ってみるよ。」

「・・・これはまたとないチャンスなのではないか。だつていうのに。」

「・・・」

質問がうかばなかったのはどうしてか。俺を飛ばした理由はもう聞いた、答えられないと。依頼者とやらも聞いた、答えられないと。これからどうすればいいかも聞いた、どうもするなど。

「・・・なんだよ、本当にないじゃないか、質問。」

「・・・そこが欠落してる限り、お前は先には進めないよ。」

「欠落？考え落としがあるつていうのか？」

「俺が言っても意味ねーよ、自分で考えな。」  
そういつて去っていった奴にまた大きなもやもやをのこされたまま、  
おれは一晚をすごした。

あいつは、何を考えているんだろう・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0931c/>

---

門

2010年11月27日20時17分発行